

特 231

292

不壽山人著

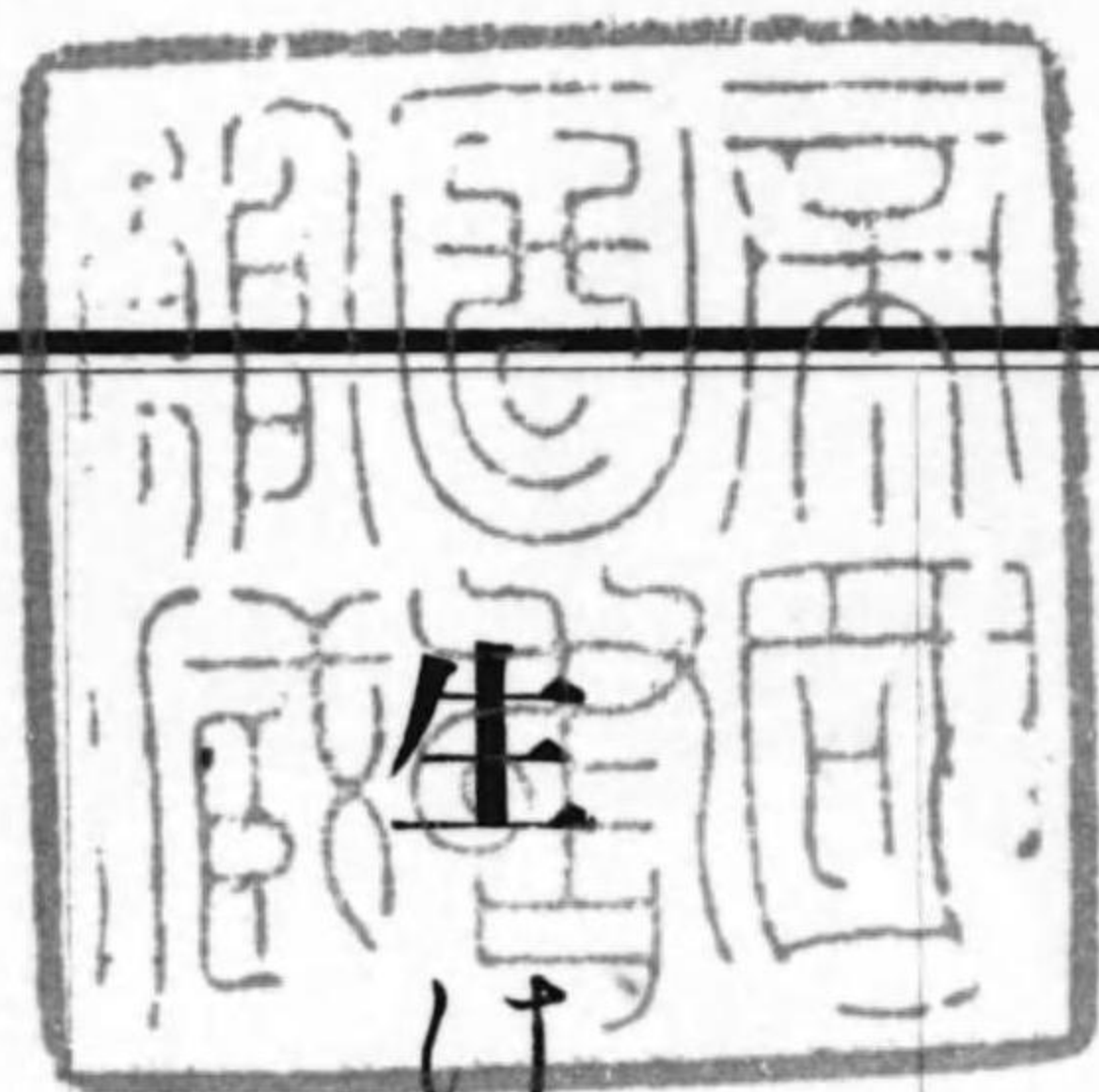
生ける豊太閣

世界創造社發行

始



特231
292



鳥井壽山人著

生ける豊太閤



世界創造社





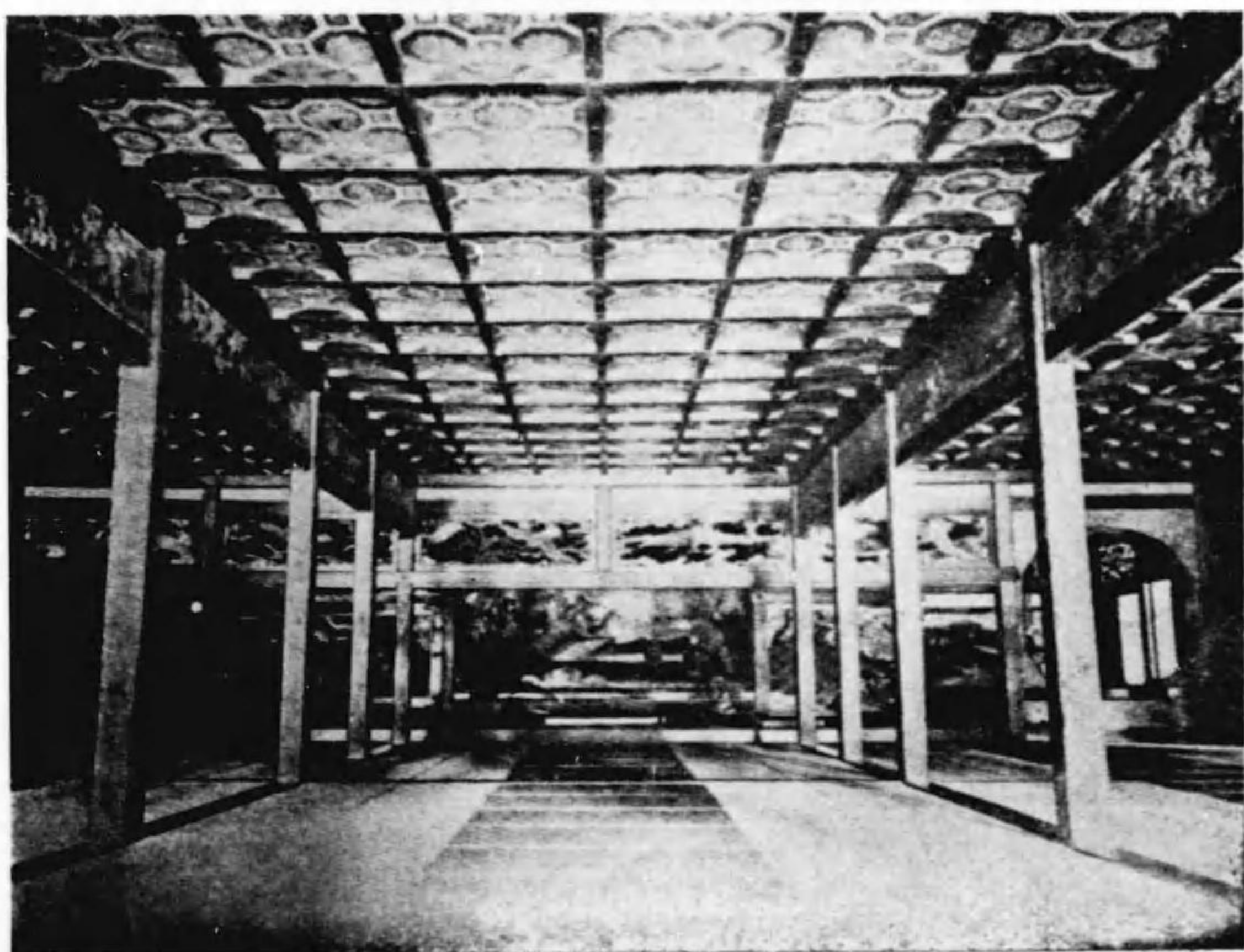
大阪城金鯱



大阪城天主閣



後陽成天皇宸筆 豊國大明神神號



西本願寺書院（もと伏見城本丸の遺構と傳ふ）



高野山に於ける豊公一族の墓の一部
（僧侶の讀經せる正面の墓は大政所の道修墓）

御沙汰書

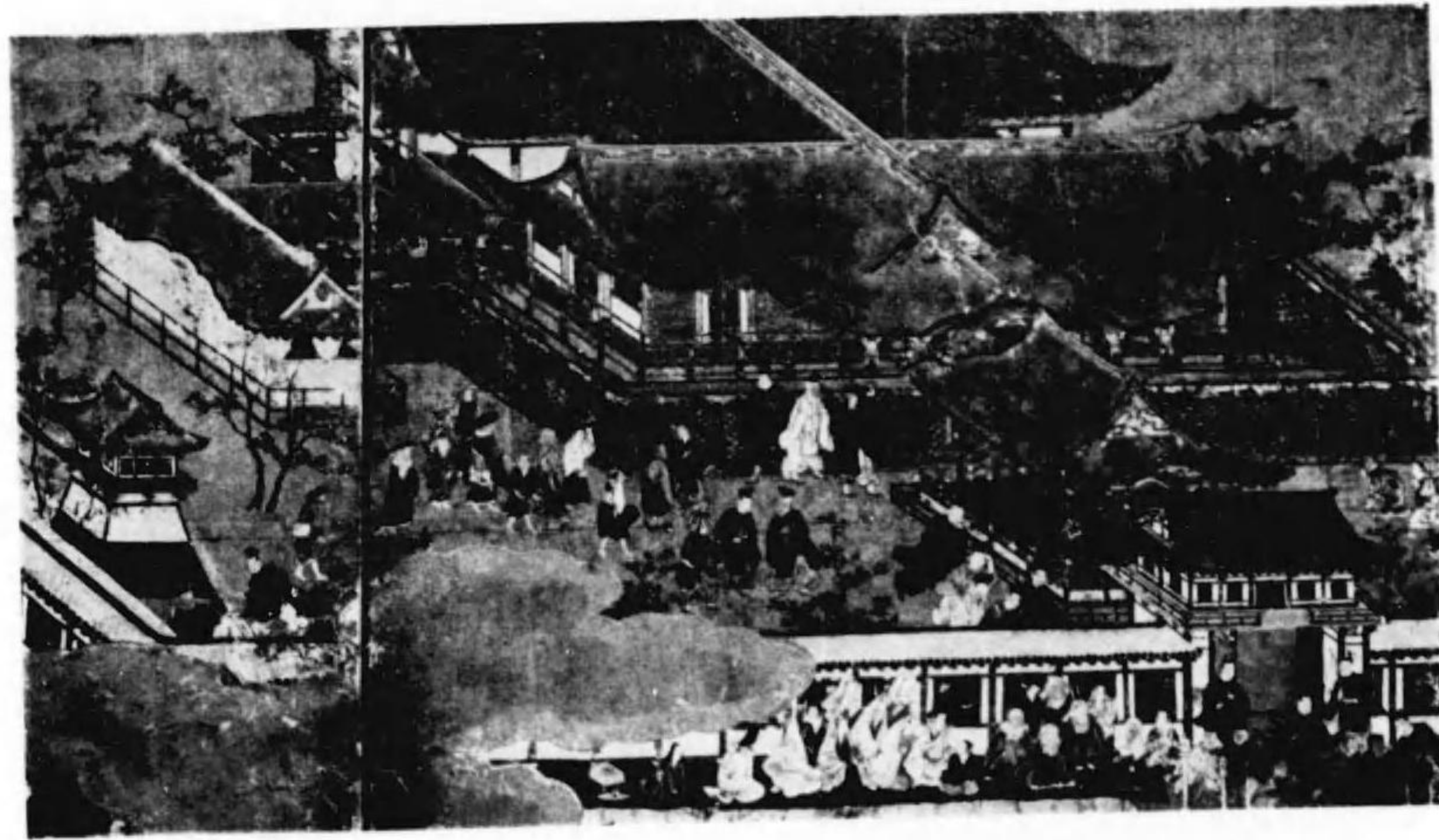
明治元年閏四月六日 神祇局並大阪裁判所
 有功ヲ顯シ有罪ヲ罰ス經國之大綱況ヤ國家ノ大勳勞有優者
 表シテ顯スル無之節何以下勳勳可被 遊武豐臣臣太閤則誠ニ
 起一臂ヲ據テ天下難ヲ定テ上吉 烈聖之御偉業ヲ繼述シ奉リ
 皇威ヲ海外ニ宣數百年之後猶彼ヲシテ寒ニセシ其國家天勳
 勞アル古今超越スル者可申抑武臣國家功業皆爾會奉ニ
 酬當時 朝廷既ニ神號ヲ追諡シテ後處不幸ニシテ其家ヲ作ス
 一朝傾覆ニ源家康繼テ出子孫相受其宗祠ノ宏壯前古無比
 豐太閤之天勳可以却却晦沒委其鬼咎ト飯ニ及及陳設
 深 歎思食條折朽散 朝堂復古萬機一新之際如此之
 廢典舉シテヘカラス加ニ宇内各國相雄飛スル時ニ當リ
 豐太閤其人ノ如キ英智雄畧之人ヲ被為得度被 思食依之
 新ニ祠宇ヲ造為其大勳偉烈ヲ表顯ニ萬世不朽ニ被為垂
 度被 仰出候列候及士庶豐臣太閤ノ思我蒙蒙候モノ不少
 宜シク共ニ合力ニ舊德寺報告 御沙汰候事

閏四月

別紙之通被 仰出候身ヲ大阪城外近傍ニ於テ和思思
 撰ニ社壇造營被 仰出候且天下有志之者獨事傳致度
 儀申出候得御差許ニ相成候間於裁判所早ニ程罷可
 取計様被 仰出候事

成業正堂書院

明治元年閏四月六日大阪へ賜はりたる
 豊公祭祀の御沙汰書謹書 （大阪豊國神社藏）



京都豊國神社藏國祭屏風に於ける初見の豊國廟



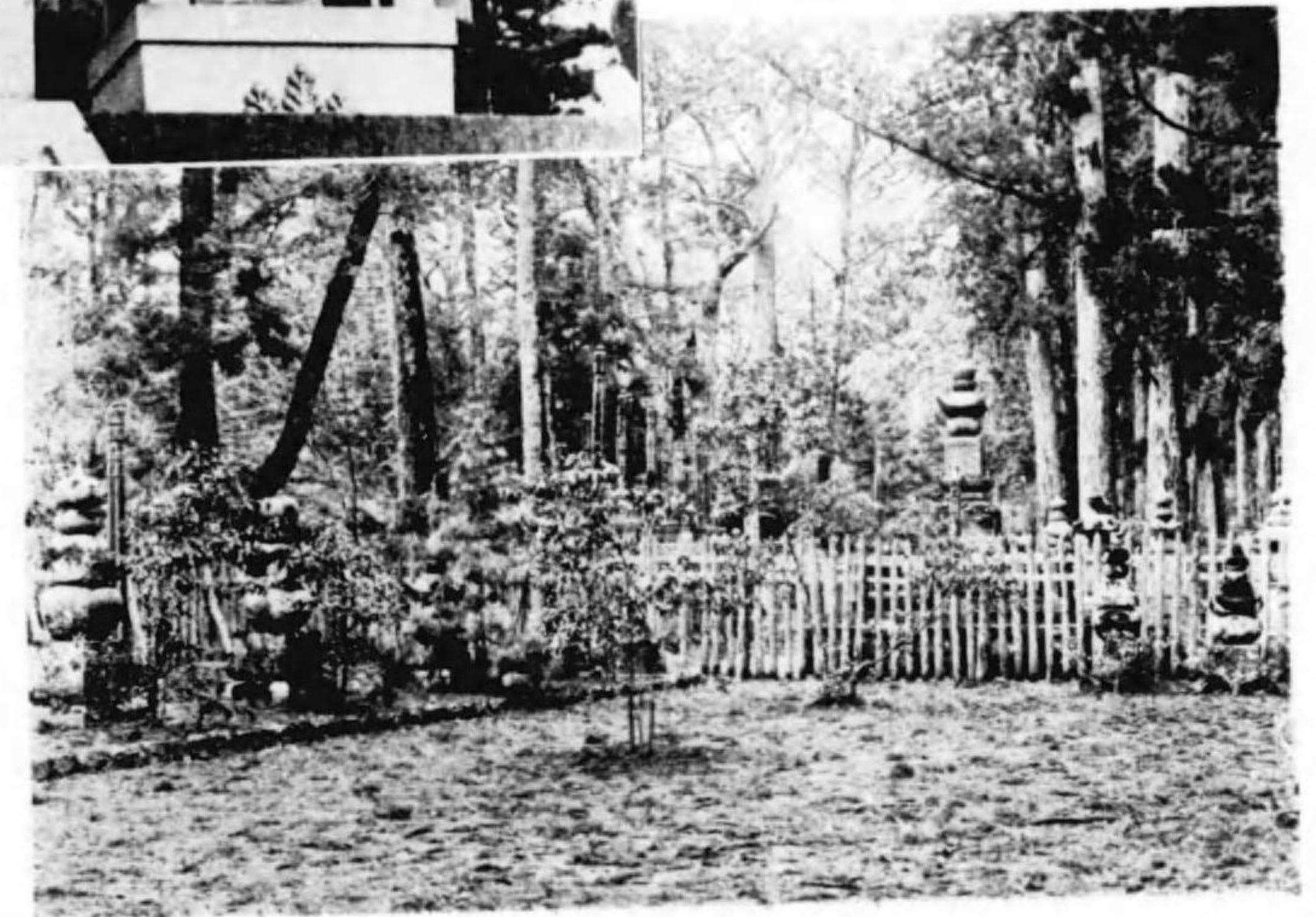
初見の豊國廟に於ける太閤の現狀



上、大阪豊國神社現狀

中、京都阿彌陀寺頂上の豊公の墓

下、高野山に於ける豊公一族の墓



秀頼公筆 豊國大明神號



大阪陣に見えたる大阪城天主閣 (黒田家藏)



阿彌陀峯豊公の墓全景



印朱公豊



木下藤吉郎像

(りよ記閤太本繪) 公豊の代時年青



景全城阪大



(垣石の殿佛大とも) 垣石社神國豊都京に共 下 中 上

自序

大大阪の空を壓して、昭和六年三月、大阪城新天守閣が再建された時、西に向つて建てられたその壯觀を仰いで、予はいつも友人の誰彼をつかまへては、『これはきつと西に向つて戦争があるぞ』といったものだった。

果してこの豫言は的中した。同年九月十八日、恰も豊公薨去の三百三十三年の命日（太陽曆に換算して）に、滿洲事變が起り、次いで今次の事變となつて、西の方大陸に向つて皇威擴大の聖軍が進めらるるに至つたので

ある。

予は此處に豊公の日本史における位置を回顧すると共に、更に豊公を研究したる結果、意外なる發見をなすに至り、愈々豊公を一層鄭重に祭らざるべからずとの信念を固くしたのである。

即ち萬世の聖天子にしました明治天皇が、明治維新の劈頭、特に豊公を祀れと宣ひし恩命を拜したことがこれである。

これは予のみならずその方面の識者以外にはあまり知られてゐないことであつた。

明治天皇の恩命の詳細は、本書中に繰返して謹述する所であるから、一

讀して讀者はその眞義を領得せられるであらうが、畏くも明治天皇が豊公を祀れと宣ひ、豊公を以て、萬世人臣の模範と賞せられ、上古列聖の偉業を翼賛し奉れる英雄と認め給ふたのは、皇威を擴大せんが爲に、豊公が雄大な大陸政策並に海洋政策を實施せんとしたからである。

今次の聖戦始まつて、ここに滿二年、皇軍將兵の勇猛果敢なる活動により、いまや日に日に大東亞の地圖が、興亞の一色に塗りかへられつつあるは、これひとへに、天皇の御稜威の然らしめ給ふところである。此處に當つて皇威を擴大せんとした豊公神靈の今も猶生けるを惟ひ、その加護の決して輕からざるものがあることは、疑なきところである。

即ち豊公の神靈は、時運到来せりと見て、興亞の機を靈示し、いまやまさしく興亞の聖業を翼賛せられつつあるものと信ぜられる。

かくてまた、國民の間にも、豊公の大志を偲び、その雄圖を思ふの情が澎湃として湧き起りつつあるは、頗る當然のことといはねばならぬ。

予はもとより一介の商賈であつて、史上の豊公を論ずる資格もなく、文をやるにも亦拙劣の謗を受くべきは、既に覺悟するところである。

而も敢てここに豊公を祀るべきことを提唱する所以は、明治天皇の聖旨を奉じ、興亞の長期建設の上に、より強き豊公神靈の御加護を仰がんとするものに外ならぬ。

即ち予が興亞日本の彌榮を願ふあまり、敢て豊公を祀れと提唱するは、よつてもつて皇恩の萬一に酬い奉り、同時に護國の忠靈を顯彰せんとする微意に外ならぬ。勿論説いて足らざるところ、誤れるところは、江湖の御高教を得ば幸甚である。

昭和十四年七月興亞記念日記す

鳥井壽山人

目次

| | |
|--------------|----|
| 豊公の再来 | 三 |
| 再来の意義 | 七 |
| 御大典記念の天守閣 | 九 |
| 明治天皇御製と豊公 | 二二 |
| 豊公とその靈力 | 一五 |
| 無念のこもつた靈力 | 二〇 |
| 歴世の御神靈と國威の發揚 | 二二 |
| 豊公の武運を得たる所以 | 二五 |
| 神靈としての豊公 | 二九 |
| 護國の英靈を祀る所以 | 三一 |
| 豊公の遺命と豊國廟 | 三三 |
| 豊國大明神 | 三六 |

豊公の偉靈と明治維新……………四〇

豊公祭祀の恩命……………四二

維新に於ける豊公祭祀の意義……………四六

豊國廟再興の恩命……………四九

京都豊國神社……………五二

大阪豊國神社……………五五

豊公の神罰……………五七

豊公を海外の神社に奉祀せよ……………六一

京都豊國神社の移建……………六三

皇都東京に豊國神社を建設せよ……………六六

大阪豊國神社と天の回顧……………七一

天守閣と運命……………七四

明治の日本と國威の發揚……………七八

豊公の偉業を顧る……………八一

聖戦と御神靈の加護……………八四

御神靈と大和魂……………八七

豊公とその時代……………八九

豊公の大東亞建設の根據地……………九一

豊公と大阪……………九五

大阪豊國神社移建、造營の提唱……………九七

豊公は長期建設の人……………一〇〇

我等の願事……………一〇二

豊公精神の顯彰と發揚……………一〇五

桃山文化の復興を期す……………一〇八

生ける豊太閣

大阪の大
恩人豊公
と天守閣

天守閣の
意義

豊公の雄
圖

豊公の再来

興亞日本の心臓として、絶えざる躍進をつゞけつゝある大阪の空を壓して、すつくとばかり聳え立つ大阪城天守閣の颯爽たる姿は實に大阪をして今日あらしめた大恩人たる豊太閤の雄圖を、さながらに物語るものである。

その天守閣の頂から、燦然たる光を放ちつゝある金色の鯨は、あたかも金の都大阪の経済的使命を象徴するかの様に見える。

而して天守閣は、昔は戦時に於ける物見であり、司令塔であると共に、城主の戦はんとする意氣込を示し、或はその發揚せんとする雄圖そのものを表現する大建造物であつたことは、周知の如くであるが、もとこの大阪城天守閣を建造した豊公の抱懐せる大意志は、國內の平定と共に、西の方大陸への發展にあり、又太平洋及印度洋への進出にあつたのであるから、その大意志を表現した

生ける豊太閤

大阪城天守閣の毅然たる姿は、全く豊公の興亞の雄圖を具體的に發現せるものといふことが出来るのである。

顧るに、大阪城は今を去る三百五十年の昔、豪氣一世を蓋うた豊太閤が、その生涯の出世戦といはれ、或は又太閤の關ヶ原といはるゝ山崎、賤ヶ岳の戦の後、その出世の眞最初に、前面に大陸につゞく海洋を控へ、背後に帝都を負うた天下の要地大阪を根據地として全國を統一して大御心を安んじ奉り、國威を海外に發揚して皇威を八紘に及ぼさんが爲に、心血を注いで築き上げた金城湯池を誇る天下の名城であつた。

しかし、慶長十九年大阪冬の陣の後、まづ内外の堀を埋められて、その手足をものがれ、遂に元和元年五月八日(太陽曆六月六日)、夏の陣の終幕と共に、秀頼、淀君等を葬り去つた炎々たる業火になめ盡されて、太閤の雄圖を具現した五層の大天守閣も惜しいかな、悉く灰燼に歸し、地上から全く影を没して了つたことも、人のよく知るところである。

復興大阪
城最上層
金城

大阪城の
回顧

天守閣の
炎上

天守閣の
再建

その後、大阪の空に天守閣の英姿を仰がざること、實に三百二十一年、生れ變り、死にかはる幾百萬の大阪人は、父祖の話を傳へ聞き、天を仰いで天守閣を模索し、眼を閉じて天守閣を夢見つゞける有様であつたが、遂にその切なる望は酬いらるゝ時が來たのであつた。

それは實に不思議なめぐり合はせといつてよいであらう。

今上陛下の御即位の大典を永久に記念し奉り、昭和の大御代を壽がんがため、全大阪市民の贊助の下に、昭和六年三月天守閣は再建され、こゝに我々は再び朝に夕に、なつかしき豊公の天守閣を仰ぎ、常に豊公の壯大なる意圖を、さながらに思ふことが出来るやうになつた。これ實に、昭和の御代に生を享けた、大阪市民の最も大きな誇りといはねばならぬ。

しかも西の方、大陸に向つて建てられた堂々たるこの天守閣には、上記の如く豊公が國威を世界に輝かし、思ふ存分に海外飛躍をなさんと志した大和魂

天守閣再
建の意義

を打込んだのである。それはまた太平洋行進曲に「海の民なら男ならみんな一度はあこがれた」と歌はれる太平洋への進出の憧憬を寓したものともいへよう、さればかゝる意義を有する天守閣を再建せんとした大阪市民は、言はず語らざる裡に、右の如き豊公の大和魂を、再び大阪の地に蘇らせたいといふ熱望をこめて、再建に努力したことはいふまでもない。

豊公精神の再来

即ち大阪市民が、特に御大典記念として、天守閣の再建を望んだのは、全く昭和の御代に於ける豊太閤の再生再来を望んだからに外ならぬ。さればこの意味よりすれば、天守閣の再建は、實に全大阪市民が、待ち望んだ豊公精神の再現であり、正しく豊公の再来といふべきである。

然り、大阪城の新天守閣は、正しく豊公の再来である。然らば豊公は何が故に、この昭和の御代に再来したのであるか。

再来の意義

我々は天守閣の再建といふ事實の表面ばかりを見てゐないで、少しく立入つて眞の原因を明らかにせねばならぬ。

人間は無力なものであるから、たゞ物事の表面ばかりを見て満足してゐるが、見えざる不可思議な因縁とも言ふべき大きな力が、世の推移の裏には、常に働いてゐることは、少しく深く大勢に着眼するものにとつて、實に明かなことである。このことは、最近發行された昭和國民讀本最後の章に、徳富蘇峰翁が「運命の神と日本の前途」と題して述べた中に、「遠き古代は言はず、著者の生存したる最も近き七十餘年間の歴史を回顧すれば、我が日本國は、或る不可思議なる靈力によりて或る方角に向つて導かれつゝあるが如く感知する、我が日本は、今や自ら既定の宿命に従うて、既定の目的に向つて、運動しつゝあるものゝ如く感知する。」といつてゐるのでも、知ることが出来るであらう。

即ちこれこそ實に、年既に古稀に及んで、しかも愛國の至情とゞむる能はず、日々健筆をふるつて、近世日本國民史を執筆されつゝある老史家が、胸奥深く藏せられる透徹した

大勢に着眼

不可思議なる靈力

老史家の至言

洞察の結果から、發せられた至言といふを得べく、こゝに翁のいふ所謂不可思議なる靈力とは、以下に述べんとする所謂御神靈の力であり、また既定の宿命とは、即ちこの御神靈の力によつて導かれつゝある、興亞日本の宿命的使命であるといはねばならぬ。

興亞日本の宿命的使命

豊公偉靈の再来

されば大阪城天守閣が、右にいへる如く昭和六年三月を以て、竣工した所以も、直ちにその半歳後に起つた滿洲事變と思ひ合せ、更に續いて上海事變、滿洲國の獨立、國際聯盟離脱、其他の重要事件を経て、今次の聖戦に至つたことに思ひ及ぶ時、そこに何等か見えざる不可思議なる靈力の、導き給ふものがあることを、はつきりと感知せざるを得ないのである。

乃ち我々はこゝに思を潛むる時、昭和の御代に於ける大阪城天守閣の再建は、豊公の偉靈が、遙かに東亞の大勢を展望しつゝあつて、今こそ日本が興亞の大業に進出すべき時ぞと、その機運が熟し、その準備が正しく完了した爲に、出來たものといはねばならぬ。即ちそれは後記する如く、豊公が自ら列聖の御偉

業を顯彰し奉り、天下に號令すべき司令塔として天守閣を再建せしめ、かくて自ら再来されたものと信ずるのである。換言すれば天守閣の再建は、忠臣豊太閣の偉靈が、世界を新たにし給う天業を翼賛し奉らんとして、再来したものであると信せられるのである。

御大典記念の天守閣

新天守閣の意義

右の如き意味なくして、いかにして炎上以來三百餘年を経た昭和の御代に、突如として、天守閣が再建される筈があらうか。即ち昭和の御代に於いては、もはや天守閣の如き封建時代の設備に、何等の軍事的意義をも見出すことは出來ぬのである。かゝる意味に於いては、この新天守閣は全く無用の長物である。

然らばまた再建當時一部の人士が考へたやうに、これは單なる遊覽の爲の新名所として、名所の少い大阪に、觀光客を誘致したり、有閑子の眼を樂しませたりするだけのものでは

あつただらうか。とすれば御大典記念の意義ある建造物としては、實に恐れ多いことである。

而して今日大阪城天守閣の各階は、歴史館として公開せられ、常に有意義な展覧が行はれてゐる。これは全く豊公の古を偲び、豊公の偉業を仰がしむる上に、大いに役立つ事業であるから、これこそ眞に豊公の神靈の然らしめ給うところといふを得べく、かくて豊公の偉業は、愈々明瞭となり、一般の人士の豊公に對する認識も、益深くなりつゝあるのである。

天守閣の歴史館

天守閣の來の意義

しかしなほ、我々の考ふべき問題は、天守閣が本來具有せる意味に就いてある。即ち天守閣はもともと遊覽の場所でもなければ、展覧會場でもない。後記する如く、それはまた城主の運命を象徴し、城主の靈が常にそこを離れず、永久にこゝに留まる所の聖場である。かくの如き意味を有する天守閣が、再建されるに就いては、たとへ當事者は無意識であつたとしても、それを再建させるだけの見えざる隠れたる靈力が、働きかけられたものとせねばならぬ。

天守閣再興は勤王精神の表現

されば御大典を記念し奉るといふ意味からだけいへば、他の諸都市に於いて行はれたやうな、種々な計畫が、大阪にもあつた筈である。しかも大阪に於いては、敢て他の記念方法が採用されず、天守閣の再建が實現したのである。これはいふまでもなく、豊公が終始勤皇の偉人であり、至誠奉公の念より、内、國內を統一して當時の帝都を護り、外、國威を發揚せんが爲に、大阪城天守閣を築いた遺志を體して、これを再興することが、直ちに大阪人の御大典を壽ぎ奉る意味となつたからに外ならぬ。即ちこゝに勤皇の偉人としての豊公の神靈が、再來されたものと考へることが出来るのである。

そしてまたかく考へなければ、天皇の御稜威を壽ぎ奉る御大典の記念としては、一見或は全く無關係とも思はれ、或は全く不似合とさへ考へられるやうな、普通封建的意味を持つものとされる天守閣が、殊更に再建された所以を、説明することは出来ないであらう。

然らば豊公は、何が故に天守閣と共に再來されたのであるか、しばらくその由つて來る

天守閣の御大典記念の意義

生ける豊太閤
所以を考へて見よう。

明治天皇御製と豊公

明治天皇
の御稜威

而してこゝに思を潛めて、豊公の再來せる所以を思ふに、これ全く明治天皇の深き思召に依つて、その機運が熟し、時節が到來したからであると、信せられるのである。即ちその四十六年の御治世に、國威を世界に發揚し給ひ、極東の一隅に邊在せる島國日本を、世界の中心たる日本に躍進せしめ給うた明治天皇の御稜威は、國民の等しく景仰し奉るところであるが、その「關白秀吉」と題せられた、明治十七年の御製に

くまといひとらといふともおそるへし

國にこゝろをつくす此の人

と詠せられた。拜誦して直に知られる如く、「國にこゝろをつくした人」として、

明治天皇
の御賞嘆

天皇は豊公を特に賞讃し給うたのであつて、豊公の偉勳を偲び給ふ優渥なる大御心のほどは、まことに畏き極みと申さねばならぬ。

然らば天皇は、何が故に「おそるべし」と仰せられたかといへば、それは豊公の内外に渉る功業が、非常に大であつたことを回顧せられたからであることはいふまでもない。

恰も明治元年三月十四日、明治天皇は京都御所紫宸殿に於いて、五ヶ條の御誓文をお示しあらせられ、同時に御宸翰を下し給うて、

朕こゝに百官諸侯と廣く相誓ひ

列聖の御偉業を繼述し一身の艱難辛苦を問はず親ら四方を經營し汝億兆を安撫し遂に八萬里の波濤を拓開し國威を四方に宣布し天下を富岳の安きに置かんことを欲す

と仰せられたのであるが、こゝに宣べ給うた如き「列聖の御偉業を繼述し（中

五ヶ條御
誓文の御
宸翰

略) 萬里の波濤を拓開し國威を四方に宣布し、まさしく天皇の御英志に副ひ奉るべき大功業を翼賛した史上の偉人は、實に豊公その人であつた。

列聖の御偉業の翼賛

されば天皇は、同年閏四月六日、大阪行幸の際の御沙汰書(後に謹載す)に、

列聖の御偉業を翼賛せる豊公

豊公を以て「上古列聖之御偉業を繼述し奉り、皇威を海外に宣へ」た忠臣と

御宸翰の文と御沙汰書と合致す

御嘉賞あらせられたのである。即ち天皇の御英志を宣べ給うた五ヶ條の御誓文の御宸翰の御言葉と、豊公を御嘉賞あらせられた御言葉とは、御意味が全く一致し、御言葉までが殆んど同じであらせられることは、畏き極みと申さねばならぬが、此の五ヶ條の御誓文と豊公祭祀に關する御沙汰書とは、その御發布の日が、僅かに五十餘日を隔てさせ給ふばかりであるのを見ても、天皇の御思召を拜察するに難くはない。

豊公への御回顧

即ち内に外に最も多事多難を極めた幕末の難局を打開して、七百年の武家政治を一朝に廢せしめ給ひ、御齡僅かに十六歳の御身を以て、王政復古の大業を

王政復古の意義

御遂行遊ばされた明治天皇は、豊公の内外に亘る大功業を、強く御腦裡に顧み給ひ、その忠靈を嘉し給うと共に、その遺靈の永久に皇國を護るべきを期待せさせ給うたものと拜察されるのである。

おそるべきの御意義

この意味に於いて王政復古は、普通神武天皇の古に復したといはれてゐるけれども、後陽成天皇の御代に復する意味も亦ましましたことは疑ひないところである。さてこそ後年、天皇は豊公の偉業を「おそるべし」と仰せられたのであらう。さればまた後に記し奉る如く、畏れ多きこと乍ら、天皇は五ヶ條の御誓文を御示しあらせられた四十餘日後に於いて、早くも豊公に對して優渥なる御沙汰を賜ひ、改めて豊公の偉業を神として大阪に祭祀すべき勅令を下し給ひ、更に京都の豊公の廟を復興すべきことを命じ給うたのである。いまそれを記し奉るに先立つて、少しく天皇が「おそるべし」とまで仰せられた豊公の偉業の由つて來れる眞因を明らかにし、神としての豊公の偉業に及びたい。

豊公とその靈力

豊公に憑
かれた神
靈の力

生ける豊太閤

一六

思ふに豊公が、かくの如き偉業をなしとげた大きな力は、決していはゆる人間業ではなかつた。そこに強いそしてまた澤山の御神靈が、豊公に憑依され、その御神靈の力に依つて、豊公の偉業が遂げ得られたものと信せられる。「ローマは一日にして成らず」といふ諺があるやうに、豊公も亦艱難辛苦して、出世の緒をつかみ、遂に成功した苦勞人ではあるが、豊公があれ程の大業をなしとげた力は、決して豊公が直接その父祖から受けついで自分一個の力だけで出来たのではないことは、誰にも分ることである。

豊公の辛
苦

豊公の偉
業は列聖
の御神靈
に依る

即ち豊公の國內平定並に大陸經營、太平洋への進出の大志は、遠く遼れば、天照大神の御神勅を奉戴して、神武天皇がわが帝國の基を固めせられて以來、畏れ多くも、その八紘一宇の肇國精神を御繼承遊ばされた歴代天皇の御志を、奉體したものに外ならぬ。

殊にまた、神功皇后の三韓御征伐以來、一貫して歴代の天皇が抱懷遊ばされ

神功皇后
以來の御
神靈の力

た國威御發揚の、強くも亦多い御神靈の力が、豊公を加護し給ひ、豊公にかくの如き大業を翼賛せしめられたものと、拜察されるのである。

明治天皇
の御神意

かくいふと、人或はこれを不可解な説をなすものと、いふかも知れないが、實にこれは當時現つ神にましました明治天皇の御神意に依つて、明かにされたことなのである。即ち天皇が豊公を大阪に祀るべく賜はつた後記の御沙汰書に先にもいへる如く、豊公を「上古列聖之御偉業を繼承し奉り皇威を海外に宣べしたものと、御賞嘆あらせられたことに依つて、最も明白に證明出来るのである。而して上古列聖の御偉業を繼承することは、列聖の御神靈の加護に依らなければ、どうして出来よう。

御偉業繼
述の意義

されば天皇が日露の大國難に當つて

世の中にことあるときぞしられける

神のまもりのおろかならぬは（明治卅八年）

生ける豊太閤

一七

明治天皇
御製

神のまもり

と詠せられた時には、恐らく天皇は、その大御心に、上古列聖の御偉業を継述し奉つた豊公の神靈のまもりをも、必ずや嘉納し給ふたこと、拜察せられるのである。

その他の御神靈

更に近古以來に就いていへば、豊公の大陸經營、海外發展の大業の上には、元寇を克服して神國日本の眞面目を發揮し、且つ高麗を討ち、元を逆襲せんとまでした、かの北條時宗の神靈も働らいてゐられたであらうし、また直接には無念を呑んで本能寺に自刃した信長の神靈も、亦豊公に憑いてこれを果さしめたことと信せられる。即ち豊公の海外發展の志は、恰も豊公が國內平定の事業に於いて信長の志を繼いだ如く、矢張り信長の志を繼いだのであるといふのが、學界の定説であるからである。その他恐らく無數の神靈が、豊公を加護せられて、周知の如き大業をなさしめ給ふたものと信せられたが、豊公の薨去後は、豊公もまた神靈として此等の神靈と共に、後記の如くわが國威の發揚

國威發揚と豊公の偉靈

に盡されたことと思はれる。

かくて明治初年に及んでは、征韓論に敗れた大西郷の偉靈の如きも、わが國威の發揚に、大いなる力を添へてゐられる事であらう。

明治天皇の東亞永遠の平和確立の爲に給ふ上

ともあれ、此等の無數の御神靈の力が、時期が熟したと見給ふや、即ち明治天皇の御稜威を助け奉り、こゝに天皇は、東亞永遠の平和確立の爲に、日清日露兩役はいふに及ばず、日韓併合を斷行し給ひ、大正、今上兩天皇またその御遺志を承け給ふて、遂に今次の皇戰に及び、正しくその實果をあげんとし給ふたものと拜察されるのである。かく觀じ來れば、今次の皇戰に於いて、我が皇軍將兵が幾多の天祐を得、向ふ所敵無く、非常な大勝利を得たことにも又銃後國民が上下一致して、よく堅忍持久の態勢を持續し得ることにも、強き御神靈の力を感得せずにはゐられないのである。

今次の聖戰と御神靈の威力

無念のこもつた靈力

さてこゝに一つの大きな目的を持つて活動した偉大な靈力も、その目的を貫徹し終ると、その靈力はもはや弱きものとなる。これに反して、偉大な人物があつて、その目的が達せられず、思半ばに死んで、靈となつた時、その無念のこもつた靈力は、非常に力強い働きを持つものである。

かの七度人間に生れ變り、朝敵を滅さんといつて湊川に戦死された楠公兄弟の靈は、かかる無念のこもつた靈力の強さを物語る最もよい例といつてよからう。楠公のいはれた七度とは、悉度の意で、無数にくりかへすことである。

果して楠公の神靈は、朝敵を打たんとする何萬何億の勤皇の士となつて生れ變り、國史の上に幾多の義烈を遺し給ひ、今日なほ國民各自の上に生きて働き給ふのである。或はまた自分の弱い身であり乍ら、力の幾十倍する強い相手の仇敵を討ち取つた敵討の例が、古來史上に澤山現はれてゐるのも、これ即ち無念のこもつた靈力の導きによつたも

靈力の消長

七度人間に生れ變る

楠公の偉靈

無念のこもつた靈力

後鳥羽天皇並に後醍醐天皇の御偉靈

七百年並に六百年並に奉る祭を迎へ

のと、説明せねば説明の方法がないのである。

而して、豊公の遺靈も亦、かくの如き無念のこもつた神靈として、強き働らきを有し給ふたことは、充分考へられるのである。

即ち豊公の計畫された眞實の事業は、完成したのではなく、實はこれからであつた。周知の如く豊公は、天旨を畏み國內の平定は完成したが、その大陸政策や海洋政策に於いては、漸くその入口に入りかけたに過ぎなかつた。だからこの國威發揚を志した豊公の偉靈は、その薨去後、果し遂げ得られなかつた強い無念のこもつた靈力と化して、後世に及び、時期が熟して來ると、愈々強く活動するゝこととなつたのは、毫も怪しむに足りない。

されば申すも恐れ多き事ながら、かゝる意味に於いて、逆賊北條氏や足利氏を討伐遊ばされんとして、果し給ふこと能はず、怨を吞んで崩御されました後鳥羽天皇或は後醍醐天皇等の、最も御無念のこもらせたれた御神靈は、強くも明治天皇を助けましたし、遂に明治維新の大業を遂行せしめ給ふた。しかも更に昭和の御世に於いて、その七百年並びに六百年の御式年祭を迎へ奉るに及んでは、全國民一人として、その聖徳を、仰がざるものなきに至らしめ給ふたのであつて、これ偏に御神徳の然らしめ給ふ所と、恐察せざるを得

生ける豊太閤

ないのである。

即ちこれを後鳥羽天皇の承久の昔に偲び奉り、或は後醍醐天皇以下歴世の吉野朝廷の哀史に顧るに、感慨轉た堪へ難きものがあるのであつて、今日の國民も當時の國民の血をついだものではあるが、その間に於いて、恰も國民が悉く別人となつたかの觀があるのは、御神徳の御發現によつたものと拜察されるのである。

かくの如き御神霊の御働きは、些々たる眼前の事にのみ拘泥してゐては、決して感得出来るものではないが、眼を開いて大勢を達觀し、思を潜めて國史の大局に鑑みる所あらば、そこに御神徳の炳乎たるものがあらせられることは、自から明白であらう。

國史に炳乎たる御神徳

歴世の御神霊と國威の發揚

國威發揚の御神霊の加護

而して畏れ多くもわが國威の發揚に、御辛苦遊ばされた御歴代天皇の御神霊の力は、非常に強くあらせられることは、十分奉察することが出来るが、その

更におそるべし御意を思ふ

豊公と御神霊の加護

御歴代の御神霊が、豊公の上に大きな御力を及ぼし給ふたことは、上に謹記した如く、明治天皇が豊公を以て「上古列聖之御偉業を繼述し奉」つた忠臣と觀せられ、或は「おそるべし」と詠じ給ふたことに依つて、明瞭に窺ひ知ることが出来たのである。即ちこの意味に於いては、天皇がおそるべしと仰せられたのは豊公その人よりも、むしろ豊公をして大業をなさしめ給ふた上古列聖の御神霊の力こそ、おそるべしと仰せられたものとも拜察されるのである。然らば豊公はいかにして、かくの如く御神霊の加護を得るに至つたのであるかといふに、これまた豊公に大いなる善因があつたからであると考えられるが、詳しくいへば、豊公を加護された御神霊が、まづ豊公に一つの仕事を成し遂げさせ給ふと、更により偉大なる御神霊が加護し給ひ、かくの如くして、豊公が一步進めば、またより偉大な御神霊が、より大なる仕事をなさしめ給ふたものと考へられる。

朝鮮への
文書

豊公の神
國日本の
自覺

上杉謙信
に鐵砲當
らず

皇軍將士
の天祐

されば豊公の生涯には、實に種々の奇瑞があつた。豊公の母が日輪を呑むと夢見て、天文五年申の元旦に太閤を生み、それから幼名を日吉丸と呼んだと傳へる如きも、人口に膾炙する奇瑞譚である。普通これは後世の附會とされるが、實はさうではなく、豊公が天正十八年冬朝鮮に遣はした文書には、明らかに「慈母日輪懷中に入ると夢見て、吾を生めり時に相士有りて曰く、日光照す所照臨せざるなし、後年其の世を蓋ふの氣あらんこと疑を容るべからず」と述べて居り、其他外國に對する文書には、よくかゝる出自を説いてゐるのであつて、一面からいへば、これは豊公が神國日本に生れたことを誇る爲であつたと考へられるから、いはゞ豊公の神國日本の自覺を現すものとせねばならぬ。更にまた俗間に行はるゝ十八拳でも大將に鐵砲は當らぬことになつてゐる様に、武運の強い大將がよくあつて、例へば上杉謙信が小田原攻めをした時、その地池の蓮の花を見ながら食事をしてゐたのを、數名の城兵が城壁の銃眼から三度まで一齊射撃したけれども、謙信には當らなかつたといふ如き話が、傳へられてゐるが、豊公にもこんなことは度々であつたらしい。小牧の戦に於いては、豊公にもこの種の傳説がある。それは恰も今次の皇戰に於いて、わが忠勇無雙なる皇軍將士の上に屢々あらはれた様な全く不可思議な天祐であつた。しかし此等も、或は偶然といふものもあるかも知れぬが、更に大局からいつて、豊公ほど武

豊公は常
勝の英雄

豊公戰術
の定石

豊公は大
軍神

豊公の戦
は義戦

運の強い大將は、まづ殆んど史上にこれを見ることは出来ないのである。即ち豊公はその生涯に於いて、幾十幾百度の戦争をしてゐるが、しかも自分は一度も負け戦をしたことはなかつた。勝負は時の運といふけれども、戦へば必ず勝つのが豊公の戦であつた。また豊公は徒らに戦で人を殺さうとはせず、天皇の御爲にすべてを生かさうとし、従つて無用の合戦を好む猪武者の眞似は決してしなかつた。大軍を以て敵を威嚇し、一兵を損せずして勝を戦の外に得るのが、秀吉流の極意であつた。或は敵の兵糧を横取りしてこれを苦しめ、川があれば水攻めをするものと思つてゐるのが豊公の戦の定石であつた。この意味よりすれば、豊公は實に大英雄であり、古今に類ひなき大武將であり、大軍師であつたといはねばならぬ。

豊公の武運を得たる所以

而して豊公が、かくの如き武運を如何にして得たかといへば、それは全く豊公の戦が常に山崎の戦の如く義戦であり、また天旨を畏み、大御心を安んじ奉る皇威擴大の聖戦であつたからである。つまり豊公は全く私心なき、奉公の戦

皇威擴大の奉公戰

豊公とヒツトラ

小牧・長久手の戦に於ける戦一部に於ける敗

全局に勝つ

朝鮮征伐も常勝

生ける豊太閤

二六

をしたのであるから、恰も今日、皇戰に従ふ皇軍の將士の上にある如き、天祐を得ることが出来たのであると信せられる。

聞く所によれば、今日歐洲の天地を震駭せしめつゝある獨逸のヒツトラは、その心中民族を憶ふの一念より外なく、全く一點の私心なき英雄であるといふが、豊公の心事も亦これと一致するものであつたのである。

かくいへば、人或は、豊公の小牧、長久手の戦に於ける敗戦や朝鮮征伐の失敗を指摘するかも知れない。しかし乍ら小牧、長久手の戦に於いては、戦局の一部に於いて部將が敗戦したのであつて、大局に於いては、織田信雄は單獨講和を敢てし、かの家康も孤立無援に陥り、やがて豊公と城下の盟をなす結果を導いたのであつた。即ち豊公は一部で敗けて、全局に於いて勝つたのである。更に朝鮮征伐に至つては、これまた天が豊公に壽をかさず、統率の中心を失つて諸軍が本國へ引上げたから、充分なる戦果をあげ得なかつたけれども、戦争そのものは、一部の海戦を除いて、連戦常勝であつたことは、世人のよく知る所である。

而してこの朝鮮役に對しては、徳川時代の學者は、殆んど悉く幕府を憚り、

朝鮮征伐の眞意義

國策の戰

山鹿素行の説

時勢に左右されて、豊公が徒らに無用の戦を開き、明治以後の學者も深く考ふる所なく、それに追隨して來たために、今日なほこの説は一般に行はれてゐる様であるが、これは全く、わが開關以來の國策を無視した僻論といはねばならぬ。されば徳川時代にあつても、かの「中朝事實」を著して日本

の眞面目を發揮した山鹿素行は、豊公の朝鮮征伐について、『秀吉晩年に及んで朝鮮を征伐す。その勇膽古今を拔出せり。凡そ朝鮮は本朝の屬國藩屏たること、往古神功皇后三韓を征伐せられしよりこの方、代々その制舊記に明白なり。その後本朝の王威衰へ、武家いまだ四海平均の化に及ぶことなし。故に朝鮮久しく本朝へ貢獻すること絶えて中比より唯隣交の好を修すると稱す。故に秀吉朝鮮征伐をなし給ふ。此時朝鮮征伐の諸將志を一にして忠義を竭さんには、朝鮮は言に及ばず、大明國も一旦敗亡に至るべし。秀吉の薨逝に因て其功不全といへども、本朝の武威を異域に嚇かすこと、神功皇后以降、秀吉の治世に在り。然れば朝鮮征伐は濱武弄兵にあらざる也。』

生ける豊太閤

二七

「武家事記」といひ、時流を超越した卓抜なる見解を下してゐるのである。

時運到来
せず

かくの如く豊公の朝鮮役は、實に皇威擴大の國策を遂行せんとして、大陸の一角にその一步を踏み出したものであつたが、その薨去によつて軍を撤回するの止むなきに至つたのは、なほ未だ時運が到来しなかつたものといはねばなるまい。

豊公理想
の實現

されば、凡そ英雄の行はんとする理想を、一旦の利鈍を以て誹議してはならない。成ると敗るとは、これまた時運の然らしむる所といはねばならぬが、明治以後我國の日清・日露の兩役に於ける大捷、日韓併合、滿洲の經營、支那への進出、南海への發展等、その淵源を尋ねれば、何れも豊公理想の實現とすべく、天皇の御稜威の下に於ける、皇軍將兵の奮戦の賜であることはいふまでもないことながら、かつて朝鮮役に於いて、實果をあげ得なかつた豊公の無念のこもつた偉靈がこの皇威を翼賛、加護し奉つたものと信せられるのである。

神靈としての豊公

史家の認
むる豊公
の偉業

而して豊公の「おそるべき」偉業は、國の内外に亘り、更に内治に於いても政治、經濟、社會、思想、藝術その他文化の各方面に於いて、實に偉大なるものがあり、殆んど舊來の日本を改造して近世日本を生み出した觀があることは、史家の齊しく認むる所である。この意味に於いて豊公の時代即ち所謂桃山時代の文化は、世界史上に陸離たる光彩を放つものであるが、豊公がかくの如き偉業を成したのは、要するに上に謹記した明治天皇御製に拜する如く、すべて「國につくす」にあつた。即ち豊公が盡忠報國一點の私心なき人であつたことは、明治天皇のお認めになられた所であつたのである。このことは、この際特に國民の注意せねばならぬところである。それはいままで全く忘れられ勝であつたために、特にここにこれを強調するのであるが、人は豊公といへば、常

世界史上
に輝く桃
山文化

豊公は盡
忠奉國の
人

公人として
の豊公

豊公とム
ツソリ

神として
の豊公は
公人であ
る

公人と私
人との混
同

生ける豊太閤

三〇

に一個の人間としての太閤をのみ考へ、大業翼賛の大功績者としての太閤を忘れてゐたのである。國民に最も親しまれた太閤は一面、かく人間としての太閤であつたのであるが、此面に於ても勿論幾多の美點があり、殊に身は平民から起つて、天下の關白にまで昇つた出世頭であつたわけで、恰も今日の伊太利のムツソリーニの如く、實に儒夫をも立たしむるに足る偉人といはねばならぬ。而してここにこれから述べようとする豊公は、現人神にまします天皇の認め給ふた神としての豊公についてである。換言すれば、國家公認の公人としての豊公について、同時にまた現つ神たるわがすめらみことの齋き祀り給ふた神靈としての豊公について述べようとするのである。

偉大なる國家の神として 豊公は、次ぎに記す如く豊國大明神であるが、豊國大明神の御神格を仰ぐに當つても、一般にはまだ、國家の神と人間秀吉とについて混同してゐる向が多いから、特にここに注意を喚起しておきたいと思ふのである。

護國の英靈を祀る所以

右のことはわが國古來の神祇について、深く研究をした人には最も明白なことであるが、例へば今日東京の靖國神社並に各地の護國神社に奉祀される護國の英靈に對しても、人間と神格との相違を認識し得ない人があるのである。即ちその英靈が、在世した時は、基督教徒又は佛教徒であつたから、これを祀るにも基督教又は佛教を以てした方がよいのではないかといふ意見の如きがそれである。

しかしこれは全く認識不足であつて、古來わが國では戦争は常に公事とされるのであるから、戦争と云ふ公事即ち國家の爲に私の生命を捧げた靈を、護國の英靈として公に祀られる時は、國家即ち公の元首であらせられ、現人

私人とし
ての英靈

戦争は公
事

生ける豊太閤

三一

英靈は國家の公神

英靈に私的性質なし

我國獨特の公の意義

神にまします天皇が、その國家への功勞を嘉納し給ひ、その靈を公のものとして祀られるのである。ここに一臣民の靈は、國家の神として再生するのである。されば、かかる神なるが故に天皇も亦、靖國神社に行幸され御親謁あらせられるのである。一臣民としての榮譽は、斷じてこれに過ぐるものはなく、ここに皇軍將兵の活動は、常に奉公の一念に終始するに至るのであるが、しかも靖國神社に於ける英靈には、全く私人としての性質はないのである。さればその英靈が在世した時、基督教を信じたか、佛教を信じたかといふ如きは、この場合全然問題にならないのである。

ここにわが國獨特の公の意味があるのであつて、天皇はこの公を上御一人として、御一身に體現まします現つ神であらせられるから、その勅命によつて、初めて臣民は國家の神として祀られるのである。その勅命なくしては、何人も國家の神とはなり得ないのである。

神とその國家的意義

難波を思ひつつ去る

豊公薨去の場所は桃山御陵の地に當る

わが國に於ける神祇は、かくの如く最も重大なる國家的意義を有することは既にあまりにも明瞭なことであるから、この公の意味に於いて、豊公の神靈即ち豊國大明神を考察し奉りたいと思ふのである。

豊公の遺命と豊國廟

蓋世の大英雄であり、史代的最大政治家であり、且つ武門武士あつて以來の大勤皇家であつた豊公は、今を去る三百四十一年の昔、愛兒秀頼にやるせない思を遺し「難波のことも夢のまた夢」と最後の瞬間まで大阪を憶ひつづけて、伏見城に薨去された。その場所はどの邊であるか、いま明かにし難いが、恐らくそれは、畏れ多いことながら、明治天皇の萬代に鎮まり給ふ、只今の桃山御陵のあたりではなかつたかと考へられる。即ち伏見桃山の明治天皇陵の御場所は、もと伏見城の本丸千疊敷の跡と傳へるのであるから、豊公は正しく、此の

西本願寺
書院伏見
城本丸の
遺構と傳

明治天皇
親しく地を
相し給ふ

明治天皇
御愛讀の
御書

豊公の靈
天皇を迎
へ奉れる
か

生ける豊太閤

三四

地に於いて息を引取つたのである。時に慶長三年八月十八日（太陽曆九月十八日）丑時（午後二時）であつた。

洩れ承るところに依れば、いま明治天皇の桃山御陵の地は、天皇御親ら地を相し給うて、崩後陵墓を築かせられ、萬世の聖域たらしめられたといふことである。しかもまた明治天皇が、平素御愛讀遊ばされた御書は、實に太閤記であらせられたといふ。（尾池義雄氏著「太閤」五一二頁参照）

上に謹記した様に、維新の業成るや早くも豊公を祀り給ひ、列聖の御偉業を繼述遊ばされ、清國を懲らし、露國を退け、日韓併合を斷行し給うて、東亞永遠の平和の基を確立遊ばされ、豊公の成し遂げ得ざりしところを成就し給ひ、以て豊公の無念を晴らし給うた明治天皇が、太閤永眠の地に、永久に鎮まり給ふこととならせられたのはこれをしも偶然の一致と稱し奉つてよいであらうか。忠臣豊公の偉靈は、永遠に天皇の御側に待して、皇運の隆昌を扶翼し

豊公と西
王フイリ
ッブ五世

豊公の遺
命

御所に向
つて埋め
らる

阿彌陀ヶ
峰
比叡山と
並んで國
家を鎮護

奉つてあるものと拜察せざるを得ないであらう。

されば豊公の英魂は明治の御代にあつて、快よくその眠を覺し天皇を助け奉り、天皇の御英靈ここに鎮座ましますやまた快よく瞑することが出来たであらうと考へられるのである。

豊公の死後、かねての遺命により、その遺骸は京都阿彌陀ヶ峰の頂上に葬られた。しかもその遺骸を埋むるに當つては、正しく西北の御所に向つてこれを埋め、ありし日の豊公が、日夜大御心を安んじ奉らんとして活動した如く、永遠に御所を護り奉る人柱となつたのである。蓋し阿彌陀ヶ峰は、東山三十六峰中、南部に於ける最高の山であり、御所よりは東南に位する絶勝の地である。されば王城の東北に當る鬼門を鎮護せしめんが爲に建立された比叡山延暦寺と相並んで、豊公に最も優渥なる御愛顧を垂れ給うた後陽成天皇のおはします御所を、晝夜を分たす護り奉る、これが實に豊公の本懐であつたのである。

生ける豊太閤

三五

かくて、阿彌陀ヶ峰頂上には、豊公の墓が築かれ、やがてまたその山麓のいま太閤坦と稱せられる所に、豪壯華麗を極めた豊國廟が營まれたのであつた。

豊國大明神

神號を贈らる

後陽成天皇の宣命

兵威を海外に振ひ恩澤を率土に施す

豊國大明神の神號

翌慶長四年四月十七日、後陽成天皇は、右の豊國廟に對して、豊國大明神の神號を贈られた。その時大納言勸修寺時豊、中納言正親町季秀等は、天旨を奉戴して、後陽成天皇の豊國大明神に告げ給ふ宣命を、その廟に傳達したのであつた。いまその宣命を謹記すれば左の如くである。(原宣命體)

天皇ガ詔旨ヲマト故博陸大相國豊臣朝臣ニ詔ヘト勅命ヲ聞食ト宣ラス。兵威ヲ異域ノ外ニ振ヒ、恩澤ヲ率土ノ間ニ施シ、行善敦而德顯ル。身没而名存セリ。ソノ靈ヲ崇テ城ノ東南ニ大宮柱廣敷立テ吉日良辰ヲ擇定テ豊國ノ大明神ト上給ヒ治賜フ。此狀ヲ平ケク安ケク聞食テ、靈驗新ニ天皇朝廷ヲ寶

永遠に天皇朝廷を護り賜へ

宣命謹解

後陽成天皇恩命

豊國山

位無動ク常磐堅磐ニ、夜守日守ニ護幸給ヒテ、天下昇平ニ海内靜謐ニ護恤賜ヘト、恐ミ恐ミモ申賜ハクト申ス
即ち『天皇が豊公の偉靈に告げ給うた大御心は、國威を海外に輝かせめぐみ世界に施こし、その行ひも情深く、徳も高かつた豊公は、死してなほその名を忘る能はざる所である。よつてその靈を尊んで、京都の東南に壯大なる神殿を造り、よき日を選び定めて、豊國大明神といふ神號を賜うのである。このことを平けく安けく承知して、愈々その靈驗をあらたかにして、朝廷即ち國家を護り、固く永久に萬世一系の皇統動きなき様に、夜も晝も暫らくも休みなく守つて、世界が平和に榮え、國內も靜かに治まる様に、まもりめぐんで貰ひたいと、謹んで願ふところである』
と仰せられたのである。

かくの如く後陽成天皇は、公人としての豊公を、國威をあげ恩澤を國土に施した偉人と認め給ひ、その偉靈をして萬代に朝廷を護り國運の彌榮を守らしめんが爲に、前記の如く阿彌陀ヶ峰に鎮め祀らしめられたのである。かくて阿彌

陀ヶ峰は豊國山と改められ、萬代不易の國家鎮護の靈場とさるるに至つたのである。

豊國廟域

豊國大明神臨時祭屏風

當時その境域は、北は今の清水に接し、南は東福寺に及んで、三十萬坪と稱せられ、殊に寛潤なる墓域には、蜿蜒數十丁に亘る土壘を築いて禁足地とし、更に豊國廟は宏壯華麗、殆んど前古に比類を見なかつたことは、現存する豊國大明神臨時祭之圖屏風（京都豊國神社藏國寶）等に依つて、明らかに知ることが出来るのである。

豊公祭祀はわが神祇史上の一大先例

身骨を埋めて國家を守る

しかもわが國開闢以來、身は臣下ながらその功業をもつて死後直ちに神靈として祀られ、國家鎮護の勅命を蒙つたのは、實に豊公を以てその最初とするのであつて、この意味に於いて後陽成天皇の御英斷は、わが神祇史上に一大先例を開かせ給うたものであり、まことに畏き極みと申さねばならぬ。勿論當時前田玄以等、豊公恩願の臣が、朝廷に願ひ奉つてかくの如き破格の恩命を拜することを得たのではあるが、阿彌陀ヶ峰に葬ることが、既に豊公の遺命であつたとすれば、天皇も亦その生前の功業に願ひ給ひ、更にまた死してなほ、身骨

神としての豊國の意義

國家公認の豊公精神

正遷宮祭

豊國の國家的意義

を埋めて、萬代に國家を守護し奉らんとする豊公の心事を、嘉納しましたものと拜察されるのである。

かくの如く、豊公の國家を護り國威を輝かして朝恩に酬い奉る一念が、神靈としての豊國の意義であつたのであるから、豊公の一々の事業は、ここにこれを説かずとも、天皇の大詔により、豊國大明神として、これを奉祀し給うた所以を明かにすることによつて、國家に公認された豊公の精神は、ここに自らの全貌を明らかにするわけである。

かくて慶長四年四月十七日豊公は、護國の神として祀られ、翌十八日正遷宮日時（にちじ）の宣下（せんげ）があり、直ちに同日亥時（ごごじつめどき）（午後十時）正遷宮の儀（ぎ）が行はれ、尋で十日（にち）、豊國大明神を正一位に叙せられたのであつた。而して豊國の神號は豊葦原瑞穂國（はらのみづほのくに）とよばれる我國の古名を略稱されたもので、兼ねて、天長地久萬民豊樂（はうらく）の意によつて、朝廷から賜はつた豊臣の意を寓せられたのであるから、全く深い國家的意義のあることが察知せられるのである。

豊公の偉靈と明治維新

徳川時代
初期の豊
公の偉靈

而して豊公の偉靈は、徳川時代初期に於いても我國民の上に強く働らき給ひ、國民の海外雄飛を導き給うた。がやがて鎖國時代となつては、再生再來して更に大きな活動をなさんとする豫備工作として、暫らく隠忍自重し給うかの如くであつた。かくする内に豊公の靈力は、また意外の方面にあらはれ、やがて明治維新の大業にも、その威力を發揮し給ふこととなつたのである。

徳川光圀
と豊公顯
彰

即ち豊公の勤皇精神は、早くも徳川光圀の勤皇精神を刺戟し、皮肉にも豊臣氏を滅した家康の孫をして、豊公顯彰の第一聲を揚げしむるに至つた。光圀の勤皇精神は、大日本史の編纂となり、湊川に「嗚呼忠臣楠子之墓」を建設せしむるに至つたことは、周知の事實であるが、光圀の豊公顯彰もこれと全く同一精神から出たことである。換言すれば、幕府を開かず、一途に朝威をあげ明使を叱咤して國體を明徴ならしめた豊公の事蹟は、大義明分を明らかならしめん

光圀の勤
王精神と
の合致

とした光圀の勤皇精神と、完全に合致せるものであつたからである。

水戸學派
と征韓偉
略

爾來光圀の志をついだ水戸學派は、豊公の遺徳を顯彰せんとするのが常であつたが、中にはいささか豊公を誹議したものもないではない。しかし乍らまた彰考館編修總裁川口長繻の如きは、豊公の朝鮮征伐を詳細に研究して、別に「征韓偉略」を著し、これを刊行してその事績を明らかならしめたのであつた。かくて徳川時代末期に及び、内外多事を極め、尊皇攘夷の論がやかましくなり、國威を海外に發揚すべき大英雄の出現を待望する國民的雰圍氣が、次第に濃厚となるに至るや、豊公偉靈の豫備工作は、一應完了し、俄然としてその威力を發揮せらるるに至つたのである。

豊國廟再
興の聲

されば徳川氏が大阪冬、夏の陣後、種々と難癖をつけて、元和五年無慘にも廢棄して了つた阿彌陀ヶ峰の豊公の墓並びに豊國廟を再建せんとする運動が、この皇政復古の大機運に乗じて、大いなる聲となつて現はれて來たことは、まことに必然の勢であつたといはねばならぬ。これ即ち尊皇攘夷の如き大業を遂行せんが爲には、勤皇のために粉骨碎身し國威を海外に輝かして夷敵をして顔色なからしめた豊公の偉靈を祀り、その加護を得んとするものに外ならなかつたのである。

再興の意
義

王政復古

明治天皇
の大行幸

大阪に賜
はれる豊
公祭祀の
恩命

豊公祭祀の恩命

かくて慶應三年十月十四日徳川慶喜は、大政を朝廷に奉還し、越えて十二月九日を以て、復古の大號令が渙發せられた。ここに輝かしき明治維新の幕は切つて落されたわけであるが、ここに明治天皇は、萬機一新の大改革を斷行し給はんとして、江戸御親征の大旗を掲げ給ひ、翌明治元年三月三十一日京都御出發、鳳輦を大阪に進め給ひ、同二十三日初めて大阪に行幸された。これが維新史上に名高い大阪行幸であるが、この際に當り、天皇は豊公の大勳偉烈を表顯し、萬世に不朽たらしむべく、閏四月六日を以て豊公に最もゆかりの深い大阪城下に、豊公を祀るべき神社造營を、御沙汰あらせらるることとなつたのである。これ實に上記の如き、豊公祭祀の大いなる聲を嘉納し給うたものと拜察される。

而して當時の御沙汰書は實に左の如く拜せられる。

御沙汰書

御沙汰書
 有功ヲ顯シ有罪ヲ罰ス 經國之大綱 況ヤ國家ニ大勳勞有之 候者 表シテ
 顯スコト無之節ハ 何ヲ以テ天下ヲ勸勵可被遊哉 豊臣太閤 側 微ニ起リ一
 臂ヲ攘テ天下之難ヲ定メ 上古列聖ノ御偉業ヲ繼述シ 奉リ 皇威ヲ海國
 ニ宣ヘ、數百年之後猶彼ヲシテ寒心セシム 其國家ニ大勳勞アル古今ニ超越
 スル者ト可申 抑 武臣國家ニ功アル皆廟食其勞ニ酬ユ當時朝廷既ニ神號ヲ
 追諡セラレ 候 處不幸ニシテ天其家ニ祚セス一朝傾覆シ 源家康繼テ出テ
 子孫相受ケ其宗祀ノ宏壯前古無比豊太閤ノ大勳ヲ以テ晦没ニ委シ其ノ鬼殆ト
 餒ントスルニ及 候 段深歎思 食候 折柄 今般 朝憲復古萬機一新ノ際此如
 ノ廢典舉サザルベカラズ 加之宇内各國相雄飛スルノ時ニ當リ 豊太閤其人
 ノ如キ英智雄略ノ人ヲ被爲得度 思食 依之新ニ祠宇ヲ造營シ 其大勳偉

上古列聖
の御偉業
を震贊し
奉る

經國の大
綱

御沙汰書

烈ヲ表顯シ 萬世不朽ニ被爲垂度 仰出候 列侯及士庶豊太閤ノ恩義ヲ蒙
リ候モノ不尠、宜シク共ニ合力シ舊徳ニ可報旨

御沙汰候事

いま其の御思召を謹述すれば、

御沙汰書
謹解

『手柄のあるものをほめ、罪あるものを罰するのが、國家を治むる大綱である。まして國
家に大きな手柄のあるものを表彰せずして、何を以て國民を善導することが出来ようか。
豊太閤は身卑賤より起つて、一身の力を以て國家の難を平定し、上以列聖の御偉業をうけ
つぎ奉り、皇威を海外に輝かし、數百年の後も、なほ彼國をして我國を恐れしめてゐる。
その國家に大きな手柄のあることは、前古に類のないものといはねばならぬ。大體武臣に
して國家に手柄があれば、皆その歿後これに酬いるのが常であり、豊太閤も當時朝廷では
既に神號を追贈されたのであるが、不幸にも天がその家に幸せず、家が倒れ、徳川家康が
繼いで出で、その子孫が相續したため、豊太閤の廟は、その宏壯なること前古無比であつ
たが、反つて豊太閤の大きな手柄を埋もれさせて了つて、その神靈も殆んど飢えんとする
に立至つたことを、深く歎き思召された折柄、今回朝政古に復り、萬づの政治を一新され

御沙汰書
附屬文書

る時が来たから、かくの如き廢典は興さなければならぬ。其の上、世界各國が互に雄飛
するの時代に當り、豊太閤その人の如き、英智雄略の人を得させられたく思召される。こ
れに依つて新らしく神社を造營し、豊太閤の大きな手柄、勤皇の志を表はし、萬世に滅
びざる様にせよと仰せ出だされる所である。諸大名及び武士庶民にして豊太閤の恩義を蒙
つたものは少くないことであるから、宜しく協力して、昔の恩に報いよ。』
略々以上の如き優渥なる御思召であつたのである。そして右の御沙汰書と同時に、また
左の如く仰出された。

大阪に祭
祀すべき
恩命

別紙之通被仰出候ニ付テハ大阪城外近傍ニ於テ相應之地ヲ撰ヒ社壇造營
被仰出候且天下有志之者御手傳致度儀申出候得ハ御差許ニ相成候間於裁
判所早々程能可取計様被仰出候事

即ちこれに依つて、豊公を大阪に祀るべき明治天皇の御思召を明瞭に知り奉
ることが出来るのである。

明治天皇
の御思召

而して特に右の御沙汰書中に、上記の如く豊公を以て「上古列聖之御偉業ヲ

當時の日本は累卵の危きにあり

繼述シ奉リ、皇威ヲ海外ニ宣ベ數百年之後猶被ヲシテ寒心セシム其國家ニ大勳勞アル古今ニ超越スル者ト可申」と仰せられ、更に「宇内各國相雄飛スルノ時ニ當リ豊太閤其ノ人ノ如キ英智雄略ノ人ヲ被爲得度思召」と宣うたのは、誠に恐れ多い極みであつて、當時の日本の實情を回顧すれば、世は皇政に復したとはいへ、内になほ幕府に心をよするものがあり、外に歐米列強の窺ふあつて實に日本は累卵の危きにあつたのである。

維新に於ける豊公祭祀の意義

當時の歐米列強

明治元年は西紀一八六八年に當り、西洋史上に於いては、自由統一主義流行時代と呼ばれ、英國の産業革命が完成し自由主義を以て世界經濟を制覇しつゝあつた。續いて今日の伊太利、獨逸も國家統一により次第に世界市場の分割に参加したのであつた。先づ一八七一年(明治四年)の獨佛戰役により、その統一は完成し、これより時代は、帝國主義世界政

歐米各國侵略の魔手を延ばさんとする

策亂舞の時代に入り、歐米列強はその侵略の魔手を亞細亞・亞弗利加・太平洋諸島等の地に及ぼすに至つたのであるから、右の御沙汰書に「宇内各國相雄飛するの時」と仰せられたのは、眞に世界の大勢を洞察し給ふたものといはねばならぬ。

明治天皇の御待望

かかる國歩艱難の際に、國內では、なほ同胞互に相せめぐ状態にあつたのであるから、皇道世界維新の御英志を抱かせられた天皇は豊公の如き大人物の出現を待望ましますこと、實に切なるものがあらせられたに相違ない。即ち天皇は、その切なる御思召を右の御沙汰書に、如實に吐露せしめ給うたものと拜されるが、かくて天皇は、豊公の偉靈を祀らしめ、その靈力の發揮によつて、一層皇運を扶翼せしめ、萬機一新の非常時を克服し、國家を富嶽の安きに置きたいとこの御念願であらせられたことは、掌を指すが如く明々白白たるものである。

明治天皇豊公を祀らせ給ひし御意義

大阪に勅命を下し給へる御意義

しかも明治天皇が、これを大阪に命じ給うたのは、豊公が大阪を以て上記の

人心の一新

萬里の波濤を拓開給ふ

如く國內を平定して大御心を安んじ奉り、更に世界發展の大志を實現すべき根據地として、かつて大阪城を築いたところであるからに外ならぬ。即ち天皇は大久保利通等の意見により、人心を新にすべく遷都を決意遊ばされ、江戸御親征の鳳輦を、大阪の地へ進めさせられたのであるが、前記五ヶ條御誓文の御宸翰にも宣うた如く、「萬里の波濤を開拓せんが」ために、特にかつて萬里の波濤を拓開せんとした豊公の雄圖を思召され、ここに豊公祭祀の恩命を下し給うたものと拜察される。しかもそれは、豊公が上に謹記せる如く、「上古列聖の御偉業を繼述」した偉人であるからであり、天皇も亦上古列聖の御偉業を繼述し給はんがために、いたくも御宸襟を惱まし給うたからに外ならぬ。かくて我等は豊公に對する天皇の御思召が奈邊にましましたかを充分拜察することが出来るのである。

當時この事はかつて豊公と密接な關係にあり、幕末に於いては尊皇攘夷の大旗をかざし

木戸孝允の發議

京都へ還幸

大阪への勅命第一

豊國廟再興の御沙汰書

て、終始一歩も退かなかつた長州藩の志士木戸孝允に發し、岩倉具視公によつて、上奏せられたと洩れ承るにつけても、その因縁の奇しきを思はざるを得ないものがある。然るにその間、江戸城は無血開城を見、事態は一應收まつたから、天皇は大阪御駐輦前後四十餘日にして、閏四月七日大阪を發し給ひ一先づ京都へ還幸あらせられたのである。

されば右の御沙汰は、天皇が維新の最初に當り、特に大阪に賜うた第一の勅命であり、明治以後、世界の大阪として發展すべき大大阪の使命を、豊公の偉靈をして、加護せしめ給うたものとも拜する事が出来るであらう。當時大阪の住民が、いかに感激奉戴したかを察することが出来る。

豊國廟再興の恩命

右の豊公祭祀の恩命を下し給うてから、一ヶ月餘を経て同年五月十日、今度は京都阿彌陀ヶ峰即ち豊國山の豊國廟祀の御再興を仰出され、左の如き優渥な

生ける豊太閤

大閤は撥
亂反正翼
戴糾合其
功績六合
に亘る

萬世人臣
の模範

官祭の御
執行

御祭文

御沙汰書を賜うた

先般浪華ヨリ大駕御凱旋ノ節豊太閤ノ社御建立被仰出候抑太閤ハ撥亂反
正翼戴糾合其功績六合ニ亘リ加之皇威ヲ海外ニ赫輝シ寶運ヲ振起シ萬世人
臣ノ模範ト相成候段深ク御稱譽被遊先年致敗毀候豊國山ノ廟更ニ御再興被
仰出候依テハ當時其恩願ヲ受候後裔ハ勿論其英風ヲ仰慕ノ輩御手傳願出
候者ハ御差許ニ相成候間天下ノ衆庶能此旨ヲ得候様

御沙汰候事

拜讀して直ちに知らるる如く、先に大阪に下し給うた思召と全く同様の御趣
旨であり、しかもこの方には、萬世人臣の模範とまで豊公を激賞あらせられた
のである。

而して更に同年八月十八日、豊公の二百七十年の薨去の日に於いては、特別
を以て神祇官より大掌典を豊國山麓墓前に參向せしめられ、官祭を行はせられ

豊國の神
の稜威

墓所修造

大御世を
守り給へ

大功を建
て大業を
起さし
め給へ

たのであるが、その時の御祭文こそ、實に豊公の遺徳を剩すところなく述べさ
せ給うたものと拜されるのである。即ち左の如く示させられた。(原宣命體)

豊國ノ神ノ威稜ハ諸藩ノ夷等マテ恐惶マリ其偉業ノ古今ニ類ヒ無キ事ヲシ
深ク感ケ給ヒ愛給ヒテ先ニ浪華ノ城ノ下ニ社造營リ齋ヒ祭レト依シ賜ヒ此ノ
墓所ヲモ修造ト大詔命セ賜ヒ又今日ノ八月十八日ノ祭日ニ種々ノ神饌設
備テ如斯ク祭ラシメ賜フ事ヲ平ラケク安ラケク受サセ賜ヒテ大御世ヲ手長ノ
御世ニ守リ賜ヒ幸ヘ賜ヒ諸臣等ニ靈幸ヒ坐テ大勳功ヲ立シメ賜ヒ大事業ヲ
起サシメ賜ヘト掛卷モ綾ニ畏キ天皇命ノ乞願思食ス大御意ヲ聞食ト告ス

明治元辰八月十八日

謹解すれば、

「豊國の神の御力は、外夷諸國まで恐れてゐる。其の偉業が古今に類ひないことを深く感
賞し給うて、先に大阪の城の下に社殿を造營して、お祀りせよと命令された。いま此の墓

生ける豊太閤

御祭文謹

明治天皇
の大御心
による豊
公偉靈の
再生

所をも修造せよと命じ給ふ。また今日八月十八日の薨去の日に、種々の神僕を供へて、この様に祭らしめ給ふことを、平しく受けられて、大御世を永久に守り給ひ、幸ひあらせ給へ。また國民に靈験を興へて、立派な手柄をたてさせ、大仕事を起させ給へと、畏れ多いことではあるが、天皇が願はれるところである。この大御心を叶へて戴き度い。」

と仰せられるのであつて、全く先に大阪へ下し給うた恩命と同一趣旨であり、また上に謹記した後陽成天皇の宣命の御趣旨とも合致したものであるから、護國の神としての豊公の神靈は、ここに明治天皇の大御心により、新らしき意義を以て、明らかに再生再来したものといふことが出来るであらう。されば我々は、豊公の神靈を拜するに當つては、明治天皇の仰せられた御趣旨に依り、國家の公神として崇敬せねばならぬことはいふまでも無い。

京都豊國神社

別格官幣
社京都豊
國神社の
略沿革

方廣寺大
佛殿址に
再建

明治天皇
の御思召

豊國廟を
附屬地と

かくて明治元年十月、かねて徳川幕府より委任されたる京都妙法院より豊公の墓を政吳の神祇官に引継ぎ、やがて同二年八月十八日にも亦官祭を行はせられたが、同六年八月十八日、同社を別格官幣社に列せられ、又官祭を行はせらるる所があつた。以上の祭典は、當時なほ豊國神社の再建が出来てゐなかつた爲山下の新日吉神社御饌殿を以て臨時に之に充てられたのである。

京都に於ける豊國神社の再興は、その後種々迂餘曲折があり、遂にもとの豊國廟址即ち太閤垣には再建されず、方廣寺大佛殿址に建設され、明治十三年九月十五日正遷宮祭が執行されたのである。

かくて大阪に豊公を祀れと宣うた明治天皇の聖旨は、京都に變更されたわけであるが、これまた天皇の深い御思召によるのであつて、當時京都は、東京御遷都の爲にいたく寂れ、漸く衰類を來さんとしたので、これを復興する思召であつたのである。

越えて翌十四年七月一日、阿彌陀ヶ峰豊國廟域は、豊國神社附屬地たるべき旨、京都府より達があり、その後豊國會が設立せられ、山上の豊公の墓の改修

豊國會と
豊公墓の
改修

墓域

豊公墓の
五輪塔

廟址太閤

豊國神社
の境域と
國家安康
の鐘

に努力し、明治二十一年三月三十日竣工を見た。

その墓域約三萬四千坪、昔の三十萬坪に比すれば十分の一に過ぎないが、なほ壯大といはねばならぬ。山上の豊公墓には、高さ約三十二尺の大五輪塔が建設せられ、五百六十五段の石段を附設し、漸く面目を一新し、舊態に復するに至つた。

これが別格官幣社豊國神社並に今の豊國廟の略沿革であるが、その昔豪壯無比と稱せられた豊國廟は、今やその跡方もなく、太閤坦と稱せらるる廟址には、徒らに草蒸し、櫻花を植ゑて、そゞろに遊子の心を悲しませてゐる。

しかも豊國神社は、いま京都大佛方廣寺に隣して、かの慶長十九年大阪冬の陣を勃發せしめた、所謂大佛の鐘の側に鎮座ましますわけである。大佛の鐘は即ち國家安康の銳のある鐘であり、徳川家康は、その銳に難癖をつけて、後記の如く豊公一家を滅したのであるから、いはばこの鐘は、豊公一家滅亡の悲

運を奏でる哀鐘といはねばならぬが、いまは心なき遊客の撞くにまかせてあるから、豊公は朝夕いとも間近く、この哀音を聞き給ふ有様であつて、豊公の神靈も、ために安らかに鎮まり給ふこと能はぬ感がせられるのは、まことに恐れ多い次第といはねばならぬ。

大阪豊國神社

明治天皇が、浪華の城の下に豊公の神社を造營せよと仰せられた、上に謹記せる恩命は、京都に變更するに至つたが、それと共に、明治八年四月七日大阪府へも京都豊國神社の別社として、一社の創立を仰出され、同九年七月三日、社地を中之島一丁目字山崎の鼻に選定し、同十二年十一月二十八日を以て、正遷宮を行つたのである。これは實に今の中之島公園中央公會堂の在る邊で、初めは明治天皇の思召を奉戴して、大阪城の天主に向つて、東面して建設せられ、

初めは京
都の別社
として創
建

初めの境

神域猥雑を加ふ

神威甚だ振はせ給はざる觀

移建

獨立

生ける豊太閤

五六

神域こそ千坪足らずの狭いところであつたが、周圍が寛濶であり、清淨であつたため、社殿も奥床しく拜され、豊公を偲ぶにふさはしい莊嚴な社宇であつた。

しかし年移り星變る間に、中之島には、種々の建築が立ち、次第に猥雑を加へて來たのと、次に記す如く、某氏の寄附に係る大阪市中央公會堂の建設等の爲、神社は移建の止むなきに至り、しかも現存の如く周圍の大建築に壓倒せられて、豊國神社は神威甚だ振はざるかの觀を呈するに至つたことは、誠に恐懼に堪へない。

即ちその後大阪豊國神社別社は、明治四十五年七月二十九日、許可を得て、當時大阪市立中之島公園の一部であつた大阪府立圖書館西方の地に移轉の工を起し、同年（大正元年）十一月十五日正遷宮祭を執行した。これが現在の社地であるが、尋いで大正十年十二月京都豊國神社別社の儀を廢止せられた、別社として創建されてから、四十三年にして漸く獨立し、ここに改めて豊國神社

現在の社殿

大阪市中中央公會堂の建設

公會堂の偉容

と稱し、府社に列せられることとなつたのである。現在の社殿はその後更に改築せられ、昭和九年十月二十六日、遷座祭を執行されたものである。現社地は一千四百九十三坪餘であるが、舊社地は上記の如く、中央公會堂の敷地となり、社殿も昔は東面して大阪城天守に向つてゐたのが、現在では南面に變つて了つたのである。

豊公の神罰

前に述べた如く、今は亡き某氏が、百萬圓の大寄附をして現在の大阪市中中央公會堂が建設された時、豊國神社は現在の地へ移建されたのであるが、當時の百萬圓は、現在の千萬圓乃至はそれ以上にも該當すべく、某氏の大阪市民に與へた利便は、大いに徳とすべきものであつた。しかし心なき當局者は、當時豊國神社の移建に當り、社殿の向も南面に變へ、現在の如き狹隘なる地域に奉祀

生ける豊太閤

五七

某氏の自殺

神罰観面

高野山の豊公一家の墓

するに至つた。爾來市公會堂の偉容は、大阪市民の誇となり、某氏の靈も、亦大阪市民の上に生きて活動しつつあるかの如く考へられるが、しかも豊國神社を移建し、神域をけがせる爲ともいふべきか、一時飛ぶ鳥をも落す勢であつた某氏は、その後事業に蹉跌を來し、破綻を重ねた結果、遂に有爲の材を抱き乍ら、拳銃を以て自殺し、公會堂の竣工も見ないで逝去し、あはれ權花一朝の嘆きを見たことは、世人の未だに忘るる能はざる所であらう。思うてここに至れば、吾人は悚然として戦かざるを得ないものがあるのであつて、豊公薨じてここに三百四十一年、その神威愈あたらかなるものがあるといふを得べく、實に神罰観面の感があるのである。

なほ外にもこの種の例をあげると、高野山奥の院に建てられた豊公一家の墓も、明治四十三年、當時貿易商として全盛を極めた某商會主某氏が、寺僧に謀つて兆城を定め、垣を設け、石段を築いて參拜に便したのであつた。史蹟に指

某氏豊公墓域を整理し自ら墓を築く

某商會の没落

史蹟豊公一族の墓の現状

定せられて今日に残つてゐる豊公一家の墓がそれである。しかしこの時定められた兆域は、俗に能屋敷と稱せられた舊豊臣家墓地の全部であつたか否かは甚だ疑問であり、その兆域に隣接して、當時某氏が相當大きな自己夫妻の墓を建設したのであるが、或はその場所も昔の豊臣一家の墓域の一部ではなかつたかと考へられるのである。某氏の墓は今日も存するが、某氏がかかる善根を蒔いたに拘らず、その後間もなく某商會は没落し、今日その片影すら留めない様になつて了つた。これ亦豊公の神慮に觸れたものといはざるを得ない心地がするのである。

因みに、高野山に於ける豊公一族の墓とは、大正十五年豊太閤が母の大政所の逆修の爲、建立した五輪塔を初めとして、合計十基の石塔の立並ぶ一劃をいふのであるが、その中に大政所の送修墓等六基は明らかに豊公一族の墓であるが、豊公自身の墓があるかないかに就いては調査をしたけれども判然しなかつ

獻燈なく
荒れ果て
たり

豊公一族
の墓の復
舊

豊公をい
かにして
か記るべき

た。即ち高野山復興の大恩人たる豊公の墓も、高野山に於いては、猶不明のま
まに残されてゐるわけであり、且つこの豊公一族の墓には、獻燈もなく、荒れ
果てて全く忘れ去られた観があるのは、これも豊公の爲に残念な次第である。
されば高野山にあつては、更に詳しく豊公一族の墓を研究調査して、これを復舊し、非
域を改め、祀壇を設け、豊公の墓にふさはしき設備をととのへ、祭を絶えざらしむる様
し、以て永く豊公並に一族の冥福を祈り度いものである。

而して吾人は勿論好んでかかる神怪なる因縁を説くものではないけれども、
豊公一族の墓の荒廢せるを見、且つこれにからまる不思議な噂を耳にし、或は
某氏の例等を見る時、吾人は豊公の神靈を一層鄭重に祀つて、殊にこの非常時
に於いて、益々その神威を發揮されんことを、熱誠こめて祈願せねばならぬと
思ふものである。

然らばいかに豊公を祀るべきか、問題はここに轉じて實行の方法が要求され

てくるのである。

豊公を海外の神社に奉祀せよ

海外に奉
祀せよ

豊公の無
念を遂げ
しめよ

興亞の聖
業を遂行
する所以

まづ一般的に豊公を祀るべき方法に就いて、私見を述べれば、豊公の偉靈は
どうしても海外の神社に於いて、真先に祭祀せられねばならぬと信ずる。即ち
豊公は、上に謹記せる如く、明治天皇の聖旨に依り、上古列聖の御偉業を繼述
し奉り、國威を海外に宣べんとした大英雄であることを公認せられたのであ
るが、その偉業は果されず、中途に倒れたのであるから、豊公の神靈を海外の
神社に奉祀することは、豊公の遺志を遂げしむる所以であり、その無念のこも
つた神靈は、必ずやその神力を倍加して、興亞の大業を翼賛し奉るであら
う。

換言すれば、興亞の大業を遂行せんがためには、滿洲、支那、南海地方はい

海外にあらる日本人の精神的依據たるしめよ

豊公は平和建設の人

豊公を本とせよ

明治天皇の御遺志に副ひ奉る所以

生ける豊太閤

六二

ふに及ばず、苟もわが皇軍の征くところ、宣撫工作の行はるるところ、或はわが皇國の民の活躍するところ、神社を建つれば必ず豊公を祀り、その神靈を鎮座して、日本臣民の精神的依據たらしめたい。これは豊公の満足せらるるところであり、また異境に身を置く日本人にとつて、どれ程深い精神的の慰めであり、強みとなることであらう。

勿論豊公は、決して武力のみの偉人ではなかつた。今日長期建設といはるる如く、文化工作には最も秀れた手腕を發揮した世界的政治家である。このことは前に記した豊公の國內平定の態度、朝鮮征伐の發端等を顧れば、明白な事實であり、後にもいささかこれに觸れたいと考へる。されば海外に活動する日本人は、その仕事の如何に拘らず、豊公を本とし、豊公の遺志を奉體して行へば、必ず成功し、また皇國の爲になるのである。これまた先に謹掲した明治天皇の豊公に對する御稱譽の御言葉に拜すれば、自ら明らかであり、更に明治

天皇の御遺志にも副ふ所以であると信する、仄聞するところによれば、内務省神社局に於いては、海外に於ける神社に奉祀すべき神靈に就いて、苦心研究を重ねられつつあるといふが、この際に當つては、躊躇するところなく、豊公を奉祀されんことを神社局並に關係當局の方々に建議するものである。そしてまた、海外にある日本人は、豊公を祀る神社に參拜すると共に、各官公署に各戸に、各室に、豊公の分靈を奉祀し、朝夕その遺志を奉體されんことを希望するものである。これによつて初めて海外にある日本人が、奉公の念を涵養し外人との摩擦を克服してよく、豊公の如く國威を揚げ得ると信する。

京都豊國神社の移建

豊公は、勤皇の赤誠を以て一貫した人であるが、上記の如く豊公は、京都に大御所近く身骨を埋めて、とこしへに皇國を護る人柱となつたのである。しか

生ける豊太閤

六三

海外にあらる日本人に望む

豊公は帝都を護る

荒都の復興

豊公の勤王事業

創建當時の豊國廟(京都豊國神社藏國寶豊國祭屏風より)

豊國神社の現社地は不適當

生ける豊太閤

六四

も生前豊公が最も力をこめて復興した都市は、京都であつた。應仁の亂後一
有餘年、「都は野邊の夕雪雀」と、都人に涙を流さしめた荒れはてた都を、天旨
をかしこみ、天皇の帝都にふさはしく復興し奉つた豊公の偉業は、國史に炳
焉たる事蹟で、京都人の一日も忘るる能はざるところである。

而して豊公の京都復興は、悉く勤皇の赤誠より出たことであつた。まづ信
長の遺志をついで御所を修造した豊公は、更に仙洞を造營し奉り、御土圍を
築き、市街を整然と區劃して寺町、西寺町、寺の内等を設けた。そればかりで
なく聚樂第を設けたのも、方廣寺大佛を建立したのも、伏見城を築いたのも、
悉く永久に京都を帝都として榮えしめんが爲であり、その他朝廷を護り奉
る大社、大寺等の復興、造營は枚擧に遑がないが、これ皆天皇の御都京都の繁
榮を計らんが爲であつた。それから一時的にも亦、地子錢を免じたり、北野の
大茶湯を興行したり、金銀を公卿、諸大名に頒賜したりして、京都の殷賑を助

慶長へ復古せよ

大閤垣の原状

豊公精神の發揚

生ける豊太閤

六五

け、或は慶長三年の醍醐の花見でさへも、翌年後陽成天皇を迎へ奉らんがた
めに、施設大いに努めたのである。これ等の詳細についても別に稿を起す用意
があるから、今は省略するが、前記明治天皇の豊公廟祀再興の恩命をかしこ
み建造された現在の別格官幣社豊國神社は、その社地は甚だ不適當である。よ
ろしく慶長の古に復して、既に計畫中なる、もとの豊國廟の址即ちいま太閤
垣と稱せられる所へ移建せねばならぬ。そして壯大なる桃山式の神殿を造營し
諸殿を附加して以て豊公の偉靈を慰め、愈々その御神徳を發揮し給ふ様、熱誠
なる祈願をこめるのが、最も豊公の遺志に副ふ所以である。これがまた豊公に
依つて復興された京都に住む人々の、豊公への報恩であり、そのまま豊公の如
く、朝廷に對し奉り、報效の赤誠をいたす所以である。

即ちここに京都豊國神社の移轉、再築を建議する所以であるが、これは又同
時に、明治天皇が前に謹記せる如く、豊國廟を再興せよと仰せられた御趣旨を

明治天皇
の聖旨を
奉戴する
所以

豊公遺蹟
の顯彰

豊公の京
都を復興
したる所
以

豊公は帝
都を護る

生ける豊太閤

六六

奉戴する所以であるから、官民有志の御協力を得て、是非共近き將來に實現せしめたい。

それと共に全国各地殊に近畿に於ける豊公並にその一族の遺蹟も、晦没のままに葬られてゐるものが多いから、これらを明らかにし顯彰する方法も、考慮せられねばならぬことはいふまでもない。

皇都東京に豊國神社を建設せよ

豊公が京都を復興した所以は、帝都なるが故であつたことは、上記の如くである。而して豊公の本懐とするところは、天皇の大御身を護り奉るにあつたのであり、後陽成天皇も亦、豊公の勤皇の赤誠を嘉納されましたことは、上に謹掲せる宣命に「天皇朝廷ヲ寶位無動ク常磐堅磐ニ夜守日守護幸給ヒテ」と宣ふたことに依つて明かであるから、帝都が東京に奠められた明治以降に於いて

近世都市
江戸の開
発は豊公
の着眼

従來の僻
説

は、豊公の偉靈も亦、東京にまします天皇の大御身を護り奉り、東京を守護し給ふことと察せられる。明治天皇が常に豊公を忘れ給はざりし敬慮の程も、或は豊公が日も夜も、天皇を御護り申上げたからであるとも拜察されるのである。

しかも東京の前身たる近世都市として、江戸の開発を、史上に顧ると、實はまさしく豊公の着眼に依ることが知られるのである。

即ちその詳細は、尾池義雄氏が、その著「太閤」(三一八―三二二頁)の研究に明らかであるが、いま要約してこれを記せば、天正十八年豊公の小田原城攻圍中、豊公は徳川家康公に關八州を與ふべきことを約し、江戸に居城を決すべきことを説いた。依つて家康公は同年六月、窃に人を江戸に下して地を檢し、又江戸の百姓を招いて、その地の狀況を聞き、七月に至つて小田原が開城し、豊公が奥州に進發するや、家康公も亦、江戸に赴き、豊公をここに迎へて

生ける豊太閤

六七

築城の教を請ひ、後、かの江戸城を築いて、徳川三百年の基を開いたのである。

しかしこれに就いては、當時から、豊公が徳川氏を忌んで、百姓心服の舊領三河等を奪ひ、關八州を與へて遠方に封じ徳川氏の根基を覆さんとしたものと怨み、或は關八州を経営するには、小田原、鎌倉があるのに、茫々たる武藏の原の荒土に居らしめ、徳川氏を滅さんとしたものと邪推するものもあつた。後世の史家も亦、多くこの説をとつてゐるのであるが、尾池氏は研究の結果これをいはれなき中傷なりとし、豊公の眞意を述べて次の如くいつてゐる。

豊公の眞意
江戸城回

當時（中略）人口は増加して舊時の關東ではない。鎌倉は頼朝の時よかつたのであつて、家康の時によくなるはなく、小田原は早雲の時によくて、家康の時は可ではない。新に關東を管するものは、必ず新に適地を求めねばならぬ。秀吉が江戸を勧めたのはこの故である。

且つ又江戸は荒廢の地ではない。長祿元年太田道眞が城をここに築き、その子道灌が上杉氏に誅せられてからは、上杉氏の手に落ち後に又北條氏が上杉氏を攻め落すに及んで、北條氏に收められ、天正十八年四月まで北條氏が守つてゐたのである。固より今日の千百分の一でなかつたとはいへ、兎に角形勝の地として人のゐたところである。ここを以て見るときは、秀吉の意衷は、この形勝の地を開けば、廣大な都市を建てるに足り、廣大な都市を建つれば、八州を管し得るのみならず、關東北の全部を鎮め得べく、そしてその業に堪へるものは家康である、といふところに在つたのであらう。

これこそ、當時の眞相を道破せるものといふべく、以て豊公の適處に人材を拔擢した高邁なる識見を見得るが、又かの家康公の舊領を、股肱に與へたといふのも、實は、當時なほ去就の明確でなかつた織田信雄を封せんとして、信雄が受けなかつたからにすぎない。

かくて家康公は、天正十八年七月、小田原開城後僅か四十餘日を以て舊地を返附し、關八州を領して、神速に江戸に轉封したのであつた。果して江戸築城以來、徳川氏は關東北を鎮めたばかりでなく、遂に天下を取つて、江戸城は三百年統治の子孫の居城となり、江戸は又東京となつて、世界屈指の大都市となつた。實に尾池氏もいふ如く、「けだしこれも亦秀吉の賜である。英雄の着眼施設には滅多に徒爾はない」のである。

されば明治二年、明治天皇が東京に遷幸遊ばされ、萬機一新の帝都として大東京が設定された時、豊公は嘸かし地下に於いて、窺かにその先見の明を誇つたことであらう。

いなむしろ、上記伏見城本丸址に、後年明治天皇が御親から地を相し給ふて、大御身を葬らしめ給ふた御事蹟と思ひ合はすと、豊公の偉靈が、天皇を東京に御先導申上げたものとも拜察することが出来るであらう。

神のなし給ふことは、神のみこれを知り給ふのであつて、凡人の窺知を許されないことであるからである。

思うてここに至れば、豊公の偉靈は、必ずやまた今日東京にあることは疑ないところであるから、東京にも亦豊公を祀つて、豊公の歴代天皇を護り奉らんとする遺志を遂行せしめねばならぬ。これ東京に豊國神社建設を提唱する所以である。

大阪豊國神社と天の回顧

而して大阪豊國神社も、上記の如く、明治天皇の特別なる御召があらせられたのであるから、それに副ひ奉る様に、更に現社地を移轉して、最も莊嚴なる社殿を造營し奉らねばならぬと信ずる。依つて再び明治天皇が「浪華ノ城ノ下ニ」即ち「大阪城下近傍に於て相應の地を撰び社壇造營被仰出候」と仰

明治天皇
の聖旨に
副ひ奉れ

石山本願寺

寺内町

石山合戦

信長の薨去

豊公の大坂築城

せられた叡慮を畏み、當社と大阪城との關係を顧みたいと思ふ。

人も知る如く、大阪城の地は、もと石山と稱し、明應五年本願寺の中興たる蓮如上人が坊舎を建て、その後本願寺がここへ移り、石山本願寺として榮え、寺内町を設けて商都大阪の基を築いたのであるが、やがて天下統一の功業を成さんとした織田信長は、帝都守護のため城廓を築かんとして、本願寺に寺地を懇望し、本願寺の顯如がこれを拒絶したところから、元龜元年より天正八年まで、前後十一年に渉る石山合戦の展開を見た。信長は遂に正親町天皇の勅旨を仰いで和を講じ、本願寺もまた朝家の御爲にここを譲り、やがて池田信輝がここに封ぜられたが、信長は他日ここに築城せんことを期したのであつた。

天正十年六月二日、信長が本能寺に斃れ、秀吉がその業を繼いで、天下統一の業に躍進するや、明敏なる豊公は、この要害の地を獲んとし信輝を美濃大垣に移し、自ら天正十一年五月（今年より三百五十六年前）三十餘國の諸大名に命じ、大淀の流を利用して、ここに大阪城を築き、金碧燦爛たる五重の天守閣を築かせたのであつた。當時來朝中の耶蘇教會師フロイスの報告によれば、

フロイスの報告

帝都の守護

世界發展の發足地

八幡の勸請

豊公はこの爲に日夜三萬の人力を使役し、工事の進むにつれて、これを二倍し三年以上を費したとあるが、かくて、難攻不落を誇る名城の出現を見たのである。今日残存せる部分は、その本丸に過ぎないが、造築當時から海内無比と稱せられた所以は、これを知ることが出来る。しかも豊公が、この城を築いたのは、明治天皇が仰せられた如く、國につくさんが爲であつて、ここを以て國內統一の根據地とし、帝都の守護たらしめんとしたばかりでなく、上記の如く世界發展の發足地たらしめんとしたのである。

されば大阪城は、當時既に豊公が鬱勃として、その胸に抱いてゐた世界發展の英志を、自ら形にあらはしたものともしふことが出来るのである。

眞書太閤記によれば、豊公は當時この名城の萬代太平の鎮守たらしめんがために、生玉の八幡宮を北向に勸請奉祀したといふ。

周知の如く眞書太閤記は俗書で、其説には史的價値は少いけれども、かかる

事情の如きは、反つて眞實を傳へたものと考へられるのであつて、以て豊公がこの名城に留めた意氣込を知ることが出来る。

天守閣と運命

而して古來の歴史を顧るに、天守閣は普通にはるる如く、軍事上からいへば、展望臺並に司令塔であると共に、軍事倉庫の役目を持ち、更にその城の運命が危くなつた時には、城兵の最後の據點としての戦を試みる場所ともなるのであるが、又平時に於いては城主の威嚴を示す築造物でもあつた。特に豊公の時代には、なほ天守閣を以て城主の住居とする風も行はれたのであつて、この意味に於いて、天守閣は又一城の中心であると共に、城主の運命そのものを象徴するものでもあつた。されば城主は、この防備嚴重な天守閣に逃げ込むことが出来れば、城主其他の將士は心靜かに自害する暇が得られたのである。

天守閣築造の目的

天守閣は城主の運命を象徴す

豊公の柴田征伐

豊公の言葉

天守閣の裝飾とその意義

安土城天守閣

豊公もかつてこの意味のことを述べられたことがある。即ち天正十一年四月二十四日、豊公の大軍が越前北庄城に柴田勝家を圍んだ時、勝家はその天守閣に登つて悠々と最後の吟をなした。夫人並に諸士等と割腹したのであるが、同時に火を掛けた天守閣から炎々と燃え上る煙を望んで、足羽山の本陣にゐた豊公は、天守閣に火の手が擧つたからには、勝家の滅亡は疑ひないといつて、直に陣營を去つて北國に向つたのであつた。川角太閤記によると、此時豊公は左右のものを顧みて「たとひ一つの天守閣でも、それは實に運命を開かん爲めの天守閣である。これ程重要な天守閣に火を掛けたのは、殞落の證據でなくて何んであらう」といふ意味を語られたといふ。

これは天守閣が正しくその城主の運命を象徴し、更にいへば、城主の魂そのものをあらはしたものであるといふ信念が、あつたからである。即ち豊公の時代には、城は最早や單なる防禦の要塞ではなく、平時に於いては、領主權を發揮するところの、力の象徴と見られたので、爲に天守閣には、特に雄偉壯麗な裝飾をも施すに至つたのである。かの信長の築いた安土城天守が、當時

大阪城天守閣の構

大阪陣屏風に見ゆる天守閣

萬人を懾服せしむ

の一偉觀であつたことは、南化の書いた有名なる安土城記に依つても窺はれるが、それにも増して大阪城の天守閣は、雄壯の面目を發揮したものであつた。柴田退治記に依ると、大阪城の天守閣の土臺を築いた時には、三十餘國の人数が、遠近の國々から集め來つた大石小石を群り運んだのであつて、その有様は、恰も無數の蟻が眞黒になつて獲物を運ぶのにも似て居り、實に「寔古今奇絶之大功也、皆人驚三耳目而已」といふ程であつた。又前記フロイスの記す所に依つても、巍然として雲表に聳え立つたこの天守閣が、金を鏤めて燦然と朝日に輝いた壯觀を偲ぶに足るものがあるのである。なほ黒田家所藏の大阪陣屏風で見ると、天守閣の外側に金色を以て鶴龜の繪が大きく描かれて居る。これは裝飾畫であるから多少誇張はあるにしても、大體その眞相を傳へたものであらう。その豪氣一世を蓋うた豊公の天守閣であるから、金色燦然として、天を摩する威容は、眞に萬人を懾服せしむる偉觀であつた。

豊公の海外發展の英志を象徴す

現在の天守閣の繪

而してかかる壯麗なる外觀は、單に豪華を好んだ豊公の虚榮心の發露と見るべきではなく、国内的には諸侯を威壓し、萬民を心服せしめんためであつたにしても、前にもいへる如く對外的には當時既に豊公の胸裡に鬱勃として湧き上つてゐた海外發展の英志を、さながらにあらはしたものだといはねばならぬ。そしてこれはまた、信長がこの大阪の地に眼をつけて以來のことであつて、信長が安土から大阪への進出を計畫して、石山合戦に十一年もの苦辛を嘗めたのも、全く國內統一と海外進出の根據地を求めんとしたからである。因みに再興された現在の天守閣の勾欄下方には、八方と睥睨する八軀の伏虎の繪が描かれてゐるが、これは昔なかつたもので、再建に當つて特に描かれたものらしい。しかもこれは異例であるが、上に謹記した明治天皇御製に「虎といふともおそるべし」と豊公を稱へ給ふた事も思ひ合はされて、偶然でない様にも感ぜられるのである。

明治以後
の日本の
発展

それはとも角として、右の如く豊公の海外発展の壮志を象徴した大阪城天守閣は、前記の様に元和元年五月八日炎上し、昭和六年再建されたのであるが、ここに再び、明治以後の日本の海外発展と、國威の發揚を顧み、豊公偉靈の再來した経過を明らかならしめ度い。

明治の日本と國威の發揚

豊公三百
年祭

乃ち明治天皇の御稜威により、日清戦争に大勝を博し、條約の改正を列國に承認せしめて、わが國威が俄然發展するに至つた明治三十一年は實に豊公三百年祭に當つてゐた。そしてこの頃より豊公に關する史實も漸く學界に知れ渡り、確實な豊公の精神が再認識される時運が到來したのであつた。從來戯曲その他の大衆文學を通じて民衆的に普く親しまれてゐた太閤が、更に識者にもその偉業を熟知せらるるに至り、ここに豊公は眞に國民的であり、且つ同時に世

史實より
見たる豊
公

界的な英雄として、國民の景仰を受けらるるに至つた。それと共に一面明治以來中央集權制度が確立し、封建的階級制度が撤廢されて、個人の力量が、最も重視さるるに至つた機運と相應じて、豊公はわが國に於て、個性發揚の最大の模範と仰がれたのである。

その後、日露戦役の大國難を克服し、韓國併合の大業を遂げ、又歐洲大戰に参加したことに依つて、島國日本は、愈世界の日本に躍進し、更に昭和に及ぶ間に、内に飛躍的な國力の充實、科學の進歩、軍器の整備を見、外に貿易の異常なる膨張があり、滿洲國の成立を誘掖する爲には、國際聯盟脱退を辭せざる程、自主外交を主張し得る日本の實力が蓄へられたのである。

かくて昭和の日本は世界史上にも稀なる短期間に於て大發展を遂げ得たのであるが、これ等は上記に蘇峰翁もいへる如く、すべて人力を超越した御神靈の働きといはねばならぬ。而してかかる日本の内外の發展の上に、豊公の偉靈も

昭和
日本
の
發展

豊公偉靈
の活動

天守閣は日本の進路を示す

天守閣西面の意義

仁徳天皇孝徳天皇の大坂遷都の意義

四天王寺の意義

生ける豊太閤

八〇

亦強く働いてゐられることは、充分感得することが出来るのであるが、上記の如く、昭和の御大典を永遠に記念する爲に、昭和四年二月八日、大阪市會が大阪城天守の再建を議決し、尋で同六年、天守閣は竣工を見たのであるから、恰もこの天守閣は昭和の御世に於ける、日本の進路を明示する運命を持つたものとも考へられたのである。それが専門家の嚴密なる研究の結果、西面して建てられたことも決して偶然ではなく、西の方大陸經營をめざした豊公偉靈の表はれであると同時に、昭和の日本が、西の方大陸に進出すべき、大いなる宿命を表徴したものといはねばならぬ。

そしてこれはまた、仁徳天皇並に孝徳天皇が、大陸との交通を思召されて、大和から難波に遷都あらせられ、或は飛鳥の昔、聖徳太子が西面せる四天王を安置して、四天王寺を御建立あらせられた聖旨とも、全く符節を合したものであり、今後愈大阪が西方大陸に向つて興亞の大業を翼賛する經濟的使命を發

豊公の墓も亦西面す

揮し、飛躍的發展を遂ぐべき運命を象徴したものといはねばならぬ。而して京都の豊國廟並に豊公の墓も、昔は何れも西北に向つてゐたのに、明治の再興に當つては、何れも西向きに改められたことも豊公の偉靈が、西の方大陸に向つて活動を始められたことを物語るものかも知れない。

豊公の偉業を顧る

されば大阪城天守閣再建當時は、誰しもそれを感知することは出来なかつたのであるが、事實は明かにこれを證明した。上にも記した如く昭和六年九月十日八日即ち恰も豊公長逝の日に、滿洲事變勃發したが、當時わが帝國が滿洲國の獨立をたすけ、國際聯盟を離脱して、自主外交を樹立したことは、明の國書を破り棄てて、皇國の眞面目を發揮せる、豊公の偉業にも比すべきことと云ふべきである。更に上海事變を経て、昭和十二年に於て勃發した今次の皇戰に至

自主外交は豊公の眞面目

時運到來す

生ける豊太閤

八一

天守閣は祖國日本の意志を明示す

豊公の分靈皇軍將士に憑けり

豊公の朝鮮役を顧る

唐人

豊公と大義名分

つては、益々さうした感を深く起さざるを得ないのである。かくて今や全支に涉つて活躍するわが皇軍將士の背後に、その祖國日本の意志を明示して、嚴然たる大阪城天守閣が聳えたち、これを發足地として、皇運を扶翼し奉らんとする豊公の偉靈が幾千幾萬の分靈として、皇戰に従ふ皇軍將士を守り、現に力限りの活躍をされつつあるものと信せられるのである。

いま豊公の朝鮮役の目的を顧るに、豊公は日本を中心として、朝鮮、支那等を一つにした大亞細亞を考へ所謂東亞の新秩序を理想とせられてゐたのであつて必ずしも所謂領土的侵略と謂ふ様な西洋式功利觀念から出發したものではなく、最後の目的は皇道の下に日支を統一せんとしたのであつた。即ちかの文祿、慶長にわたる朝鮮征伐の如きも、唐入と號して、實は明に皇道を布き以て國利民福を興さんとし、朝鮮に仲介させたが、朝鮮がそれを承知しなかつたら兵を半島に送つたのであつた。しかも豊公は神國日本の自覺に生き、大義明

加藤清正の勇戦

豫備工作完了す

今日の戦果と豊公の偉靈

長期建設と豊公の加護

分を辨へた人であつたから、義滿の如き屈辱的外交は斷乎として排斥せざるを得ず、遂に立つて朝鮮征伐が行はれたのである。加藤清正の勇猛果敢な軍振も、かくの如き國威宣揚の聖戰であつたから、ひろく人口に膾炙するに至つたのである。豊公の偉靈が朝鮮征伐で終り、有終の美を遂げ得なかつたのは、豊公の偉靈が無念を呑んで時運の熟するのを待ち、十二分の豫備工作をせんがためであつた。かくてその後、日清、日露の聖戰を経て、支那事變に於いて、果敢なる皇軍將兵が、今日の如き戦果をあげ得たのは、豊公の果し遂げ得なかつた無念の偉靈の働らきが、御稜威を扶翼し奉つて、果たし遂げしめられたものともいふことが出來よう。さればかの蔣政權の長期抗戰に對應して、長期建設の大業を完成する爲には、豊公の加護を受けねばならぬことはいふまでもない。しかもこの加護を得るためには、吾人は心をこめて豊公を祀らねばならぬことは、前言の通りである。

聖戦と御神靈の加護

聖戦と皇軍勇士の奮戦

興亞の建設

東亞永遠の平和來る

大稜威と皇軍奮戦の賜

抗日蔣政權を膺懲すべき聖戦初まつてより、ここに三年、わが忠勇無雙なる皇軍將兵は、奮戦また奮戦、朝に一城を抜き、夕に一寨を陥れて、世界戦史にも稀なる戦果をあげ、正に皇軍の占據地域は、支那の過半にも及ばんとする勢を示してゐる。加藤清正等の朝鮮征伐に於ける奮戦も亦、實にかくの如きものであつたのである。しかも今や戦雲收まつた占據地域を中心として、着々興亞の長期建設が、遂行されつゝある、東亞永遠の平和が、次第に大きな歩みとなつて来たことは誠に御同慶に堪へない。これひとへに、八紘一宇の肇國精神を以て、皇國をしろしめす天皇陛下の御稜威の然らしむるところに外ならぬ、即ちその大御心を奉戴せる皇軍將兵の奮戦の賜であることは、いふまでもないが、かゝる忠勇の發露には見えざる多くの神々の御神靈の御加護が與

つて力があることは、國民の齊しく信じて疑はないところである。

御神靈の加護

いなむしろ御神靈そのものが、畏きことながら、現人神として皇軍を統率し給ひ、興亞の大業に邁進し給ふ天皇の御上に集り給ひ、天皇の御働きを翼賛し奉つておはすものと拜察されるのである。そしてまたその御神靈は現人神にまします天皇の大御心のままに、全支各方面より、更に南海方面にまで活躍せるわが皇軍將兵に乗り移り給ひ、その奮戦を助けましますのである。即ち皇軍將士の征くところ、山野といはず河海といはず、世界の果まで御神靈は、影の形に添ふが如く、常に付き随ひ給ひ、共に歩み、共に馳驅して、或は先達となり、或は後詰となり、或は將士を慰め、或は勵まし、戰酣となるに及んでは將士と共に突撃し給ひ、或は共に眠り、共に憩ひ、晝といはず、夜といはず、一秒も將兵の心を離れ給はぬのである。これこそ實にわが皇軍將士が、最も強いといはるる所以であり、世界戦史にも稀な戦果を收め得た所以である。

統後國民への加護

國民精神の
總動員の
實現は神
靈の加護

上御一人
に向ふ心

滅私奉公
は神靈の
現れ

生ける豊太閤

八六

そしてこの御神靈の中には、屢々繰返せる如く豊公の御偉靈も亦、大いなる働きをなし給ふものと信せられる。

更に皇軍將兵ばかりではなく、銃後の國民の舉國一致の精神にも亦、天皇の大御心を承け給うた御神靈の御働らきがあらはれてゐるのである。言を換へると國民の心の一致即ち國民精神總動員は、天皇の大御心を奉戴するところから實現するのであるが、國民の各自に働らきかけ給ふのは御神靈の力である。大御心を奉戴された御神靈の力によつて、國民の心は上御一人の方に向きかへられるのである。すべて我々の心は、我儘勝手な方ばかり働き、自己の利益のみ傾きたがるのが常であるが、それを上御一人の方へ向けかへられる力は、御神靈の力といはねばならぬ。我々の個人的な心は、いくら深くほり下げて、も、どれだけ修養を積んで見ても、やはり個人的な私の心でしかない。この私の心を滅して、公に向はしめ給ふのは御神靈の力である。かくて國民の

神靈の加
護は事あ
らる時に
あらはる

明治天皇
神のまも
りを感じ
し給ふ

御神靈は
大和魂な
り

滅私奉公の心は、御神靈の加護の現はれといふことが知られるのである。

御神靈と大和魂

しかもこの御神靈の威力は、世の中に事ある時に一層強くあらはれ給ひ、その力を著しく發揮されるのである。この意味は、上に謹掲した明治天皇の御製にも「世の中にことあるときぞしられける」と宣ふた事に依つて、明らかに感戴することが出来る。

されば明治天皇は、おろかならぬ神のまもりによつて、兵力國力共に我國に數倍する露西亞を破り、東亞に於ける安定力たる、今日の日本の基を築かせ給ふことが、出来させられたのである。しかも天皇は、神にましますから、神のまもりをあきらかに知り得させられたのであるが、その神の御まもりは上は天皇より、出征將士はいふまでもなく、下は山田を守る銃後國民の一人一人に至るまで、及ばせられたことはいふまでもない。この戦勝を普通にいふ如く、大和魂の力といふならば、御神靈は大和魂として、國民に働きか

生ける豊太閤

八七

け給ふのである。つまり御神靈は、靈の力として、魂の力として活動しまするのである。

御神靈は
總和力な
り

而してこの御神靈は、畏れ多くも、わが國開闢以來の皇祖皇宗並びに歴代天皇の御神靈を初めとし奉り、その下に更に全國民の幾十億の先祖の靈力もまた、總合歸一せしめられ給ふたものと拜察される。

中心を守
る神靈

日本はかつて國初以來、外國から侵されたことがない。これは萬國無比の國體の精華であるが、實にこれは皇統連綿たる天皇を中心として奉戴しまいらせると共に、この總親和の靈力が、天皇に歸一し、その御聖業を扶翼し奉つたからに外ならぬ。即ち確乎たる中心を守るのに、各個の靈は個にして全であり、全にして個の働らきを有し、その分に依つて、皇運を扶翼し奉つたのである。その各個の神靈の中でも、上來述べ來つた豊公の偉靈は、明治天皇もその御沙汰書に仰せられた如く、上古列聖の御偉業を繼述し奉る、最も靈驗あらたか

豊公の偉
靈と皇國
の運命

な神靈であるから、皇國の運命が自然と開かれてゆき、彌榮えゆくには、皇祖皇宗の御神靈に導かれた豊公偉靈の皇運扶翼も亦、大いに力あることを感戴しなければならぬ。

豊公とその時代

豊公の歴
史を書き
改めよ

而していまや豊公の歴史は書き改められねばならぬ。勿論それは豊公に關する個々の歴史的事實に就いていふのではない。日本の生んだ空前ともいふべき、眞の國民的大英雄の全事業と、その靈力に就いていふのである。

時代の生
んだ英雄

即ち時代は人を造るが、人も亦時代をつくるといはるる如く、豊公の如き大人物は、決して時代と引き離して考へることは出来ないものであつて、所謂時代の生んだ英雄なのであるから、時代の精神を確實に把握し、時代の核心を貫く精神の具象と見ねばならぬのである。換言すればかの絢爛たる桃山時代、天皇の大御心を體して、それを決行したところに、豊公の偉大さがあるのである。しかもかかる時代を現出させる原動力として常に天皇を仰

桃山時代
と豊公

仰げば高し豊公の全容

ぎまいらせたのもまた豊公であつた。實に仰げば仰ぐ程高き山にも喩ふべき大人物は豊公である。時に白雲去來し、時に密雲立ち罩めて、或時はその半身を、或時はその全容を隠す時があつても、それらの障物か風に吹きはらはれた時には、永遠に變らぬ不斷の山が仰がれる。豊公に對する國民の見解にもかくの如き起伏があつた。

國威八紘に輝く聖

しかもいま昭和の御代に於いて、わが國威八紘に輝き、世界を指導すべき東亞の盟主として、毅然たる皇國の眞の姿が明瞭に認識され、國民各自の實踐の上へ、その皇國精神が躍如として現れ出でつつあるの時、御稜威を奉戴して國威を世界に躍かさんとした豊公の精神的全容即ちその偉靈は、愈々高く國民の腦裡に映じ來り、蘇り來るのである。かく豊公の偉靈を仰ぎ、その内包せる偉大な靈力に打たれた時こそ、實に豊公は、我等國民の胸に、心に蘇つて來るのである。又豊公の偉大な神靈の力が、我等國民を加護せらるるのである。或はこれを豊公の靈力が、我等の上へ乗り移られたともいへるであらう。而し

豊公は蘇れり

豊公の靈乗り移る

豊公の偉靈は總靈力の綜合

分靈の威力

て偉大な靈力は決して單なる一個の靈力で終るものではない。その靈は何萬何億に分出して、その力の偉大さに減少を來さない。否むしろ多くの分靈が、分れて行けば行く程、その靈力は大きくなる。これを更に考へると、豊公自身一個の靈も亦、前にもいへる如く、上、皇室を初め奉り、下、數千數百億のわが國民の先祖の靈力に導かれ、勵まされつゝ、更に當時の國民の總靈力を、一身に背負ふ大靈力を、持つてゐられたのである。そこに豊公の大なる靈力が形成され、かくて國史に燦然として輝く大事業が、自から成就されて行つたのであつた。

豊公の大東亞建設の根據地

豊公生涯の大事業は、文武、内外に互り實に多く、その一を説くにしても、相當の紙數を要するところであるから、別に詳細に説く用意があるが、いまこ

文武内外の大事業

生ける豊太閤

全東亞を打つて一丸とせん

豊公は八絃一字の皇國精神を奉戴す

豊公は言擧げせず

豊公は三傑以上

ここにこれを大別していへば、内に對しては統一と平和、外に對しては國威を發揚して、當時に於いて知られてゐた朝鮮、支那、印度、臺灣、フィリッピン、南洋諸島等の世界のすべての國を、御稜威の下に打つて一丸とする大皇國を再建設するにあつた。そして勿論當時の知識では、全東亞が全世界であつたのである。前記の唐入即ち大明征伐はその第一歩であつた。

しかもこの内外の兩者を通じて、豊公は終始、八絃一字の皇國精神の顯現に邁進したのであつた。勿論豊公は理論家ではないから、これを今日の如き理論で示すことはしなかつたが、すべてそれを實行で示して行つたのである。その點に於いても、豊公はすべて「言擧げせぬ」日本獨特の惟神の精神を把持した眞の日本の英雄であつた。

在來の史家は西洋史上に於ける三傑として、亞歷山大王、ケーザル、ナポレオンの三者を知つてゐるが、我等は東洋に於ける成吉思汗が更に偉大であり、

吾が豊公に至つては、この四者に比して、皇道宣布を使命として海陸兩方面の大經綸を遂行せる點に於いて更に大なる世界的英傑とも稱し得べく、人若し世界の五傑を選ぶならば、豊公はその最たる世界的英雄として、選ばねばならぬと思ふ。

而して豊公は屢々言へる如く大阪を根據地として、大東亞を打つて一丸とする大皇國を建て、わが御稜威を世界に發揮せんとしたのであるから、豊公によつて大阪は大東亞建設の大使命を賦與されたものといつてよい。この大使命を遂行したところに、大阪の發展があつたのである。更にそれを一層擴大充實して、今後大きいに發展せねばならぬのである。

かるが故に、身は平民の卑きより起つて、遂に關白太政大臣に進んで位人臣を極め、以て列聖の御偉業を繼述して興亞の大業に邁進した大勤皇家であり、大英雄であり、大政治家であり、大商人であり、大藝術家であり、大理想家で

大阪に生くる豊公の偉靈

大阪は豊公によつて大東亞建設の根據地たる大使命を賦與さる

豊公の偉
大なる功業
を天守閣
の下に祀る

明治天皇
の聖旨に
所副ひ奉
る

生ける豊太閤

九四

あつた豊公を偲ぶには、大阪が最もふさはしいのである。即ち大阪にこそ、豊公の偉靈は、最も力強く活動を續け給ふのである。

而して、かかる國史上未曾有の大人物の生涯を、その最もゆかりの多い大阪に偲び、更に豊國大明神としての豊公の靈力のこもつた天守閣の下に、豊公を祀ることは、現時の日本が邁進しつつある興亞建設の大業の上に、豊公の如き人材を得んとする所以であり、更にまた豊公の偉靈を仰ぎつゝ、この大業を完遂に奉公の誠を致さんとする所以に外ならぬ。換言すればわが國家、國民の上に大いなる力を致されつつある豊公の神靈を祀り、熱禱を捧げることは、一層その神靈の力を増し給ふ所以であると信ずるからである。

そしてこれは又上記の如く、かの明治維新の大難局に際して、宸襟をなやませ給ひし、明治天皇が、豊公を祀つて、その靈力の加護を願はれた聖旨に添ひ奉る所以である。

豊公と大阪

大阪の重
要さ

大阪に着
眼せる豊
公

軍事専門家の意見によれば、大阪を空襲されるならば、軍事上、經濟上、産業上日本は非常な打撃を受けねばならぬといふことである。かく大阪がたゞに日本の經濟的中心として日本の心臓たるのみならず、東亞の大阪として、更に世界の大阪として大飛躍をなしつつある現狀は、誠に同慶に堪へない。しかし大阪の今日あるは、その地理的位置が海、陸兩方面に交通の利便も多く、物資の集散に大なる便利があるからであることはいふまでもないが、思ふに早くこれに着眼して、その地理的位置を十分に活用したのは、實に豊公であり、その豊公の偉靈を留めた大阪城を中心とする城下町から發達したことは、今更いふまでもない。

されば政治的中心たる東京に在して、東亞の大命を發し給ふ天皇の大御心を

生ける豊太閤

九五

奉戴實現すべきは、商都大阪の使命である。しかもこの事を今より三百五十年の昔に於いて、既に早く實行せしめたのは豊公であつた。これは大阪に住する何人も忘れんとして忘るる能はざるところである。

されば最も困難なるべき東亞の大業の完遂の上に豊公の偉靈を祀るといふことは、豊公をして興亞の大業を翼賛せしむる所以である。而して特に豊公を大阪に祀るといふことは、たゞに大阪市民の大業翼賛を、更に更に十二分ならしむるばかりでなく、豊公に依つて賦與された大東亞建設の根據地たる大阪の使命を、より一層充實せしめんがためであり、更に豊公の偉靈の加護により、大阪人をして東亞の舞臺に、より以上の活動をなさしめんとするものに外ならぬ。換言すれば、豊公の靈を更に祀ることは、より一層豊公の偉靈をして、大阪に幸する所多からしめ、その産業力をより發展せしめ、大阪を更に世界的に發展せしめんとするものに外ならぬ。

大阪人に
靈驗を垂
れ給はん

明治天皇
の大御心
に副ひ奉
る所以

建議

大阪府下
唯一の豊
國社

神域狹隘

而してこれは上にもいへる如く、明治天皇の大阪城下に豊公を祀れと宣ひし聖旨に副ひ奉る所以であり、又明治天皇の世界發展の大御心を、大阪が奉戴する所以といはねばならぬ。
つまり吾等は、豊公の偉靈をして興亞の建設を翼賛せしめ、より活動あらしめ、更により大阪人延いて全日本及全東亞人に幸あらしめんがために、大阪に豊國神社を造營せられんことを建議するものである。

大阪豊國神社移建、造營の提唱

而して現時の大阪府社豊國神社は、規模は小さいけれども、大阪に於ける唯一の豊國社である。それにも拘はらず楯比する現代式大建築に隠没して、神域頗る狹隘、恰も陋屋に大偉靈を押しこめ奉り、いかにも止むなく義理で祀つてゐるかの如く見ゆるのは、愈々もつて豊公の大偉靈に對し、相濟まざるの感

豊公の靈
に相濟ま

神靈の威
力玩る
能はず

建議

を深くせざるを得ない。
かくては、明治天皇の聖旨も空しく、また大阪市民の最も渴仰せる豊公の偉靈も、全くその神威を明示し給ふ機会を、失ひ給ふものといはざるを得ないのである。よつて吾人は上記の如き大阪城との密接なる關係に顧み、明治天皇の浪華の城の下にと仰せられた聖旨を奉戴して、豊國神社を更に天守近くに移建し、最も壯麗なる桃山式大社殿を造營せらるべきことを、聲を大にして建議するものである。而して心ある大阪人は奮起して、必ずやこの舉に賛成せらるるであらうことを、信じて疑はないものである。

つらつら思ふに、神を祀ることは、神を祀つて幾萬の人々がそれに參拜し、熱誠なる祈願をこむるところに、神の力があらはれるのである。即ち祈れば祈るほど、萬人の祈りの力が神靈の力に加はつて、更に神力は彌増し給ふのである。もし如何なる靈驗あらたかな神を祀つても、何人も參拜せず、或はその神

神を祀る
所以

官民有志
の蹶起を
希ふ

目下の急
務

國にこと
すろをつく

域、規模が狹隘で、神域にふさはしからざる時は神も亦その靈驗を示し給ふ餘地がない。されば靈驗もつともあらたかなるべき神は、それにふさはしい神域規模を有し給ふことが、最も大切であるといはねばならぬ。この意味に於いて豊公の神靈を崇敬さるる大阪の官民諸氏の御協力により、豊國神社の移建、造營を完成するならば、豊公の偉靈は大阪の上に一層強く働らき給ふことは決して疑ない。

而してその御社格の如きも、社殿の御造營が完備するならば、自然に高まり給ふべきものであるから、たゞ明治天皇の聖旨を奉戴して實行すればよいのである。とに角目下の急務はまづ豊國神社を移轉造營すべきである。これこそ大阪にとつて最も大切なことであり、最も緊急を要することである。かくて明治天皇が御製にも仰せられた如く、國にこころをつくした豊公の偉靈は、大阪人から進んで全國民の上に強き加護を垂れ給ひ、全國民をして國にこころを盡す

様に導き給ふのであらう。

朝鮮の
人に
いろは
を用ひし
む

豊公は長期建設の人

安國寺惠
豊の日本
語教授
亂軍の狼
藉を戒む
豊公の興
亞策
京都大佛
殿址巨石
豊公の海
洋政策

而して豊公は全く長期建設の人である。朝鮮征伐の際、或人が通譯を伴ひゆくべきこととすゝめた時、太閤は笑つて、自分がゆくのは、朝鮮の人にいろはを用ひしめんがためであるといつたといふことは、有名な話であるが、これは事實であつて、太閤の命を受けて朝鮮に赴き、今日いふ宣撫工作に従つてゐた安國寺惠瓊は、朝鮮の人に日本のいろはを教へてゐたのである。又この役に朝鮮在陣の諸將に發した命令を見ても、しきりに亂軍の狼藉を戒め、非戦闘員は早く故地に歸らしめて、安住せしめんことを命じてゐる。更に支那大陸を平定して後は、後陽成天皇を北京に迎へ奉り、近郊十ヶ國を皇室へ獻じ、秀次を關白とし、更に支那各地に諸將を分封して、所謂興亞の建設を遂行せしめんと

豊公の理
想國家

したのであつた。

そして自らは寧波にあつて、更に南進の海洋政策を實現し、前にもいへる如く、一大理想國家を建設せんとしたのである。かくて東亞を打つて一丸にする大皇國を建設し、わが朝威を八紘に輝かし、國民に貿易上の利益を得しめ、海外安住の機會を與へんとしたのである。以上は海外に向つての太閤の雄圖であるが、國內にあつても、例へば大阪城や、京都大佛の造營に當つては、頗る大きい石を運ばしめて石垣その他を築造してゐる。これは石が大きいと一寸他へ移すことが出來ず、それが壊されないからであつた。果して今日大阪城や大佛の石垣は、歴然として太閤の壮志を物語り、その意志はその偉名と共に永久に湮滅しないのである。更に豊公並にその一族によつて再建、修造された近畿の大社大寺等は、枚擧するに遑なき程であるが、それらは殆んどすべて今日に傳へられ、多くは國寶建造物に指定せられて、永久保存の道が講せられてゐるの

巨石を以
て築造

大社、大
寺の修造
と其の永
久保存

靈驗最も
なるべし

建議の所

である。これこそ眞に豊公が、長期建設の人たる事を物語る確實な證據とする
ことが出来るのである。しかも豊公は上にも度々いつた様に、國內平定は完成
したが、海外に對する長期建設の大業は、目的を貫徹しない内に薨去され、思
半ばにして靈となられたのであるから、豊公の無念のこもつた神靈を祀ること
は、其靈の志ざした長期建設の上に、靈驗最もいやちこなるべきを信じて疑は
ない。

されば上記の如く、我等はまづ豊公の神靈を海外の神社に祀らんことを建議
するのであるが、更に京都の豊國神社を豊國廟址に復古し、大阪の豊國神社を
移轉、造營せんことを建議する所以も亦、この興亞建設翼賛の意に外ならぬの
である。

我等の願事

各地豊國
神社の造
營又は整
備

豊公顯彰
はむしる
運すぎた

しかし今
遅くはな

(一) 我々は上記の如く、京都、大阪兩豊國神社の移轉、造營を完成し、其他
名古屋、福岡、長濱等の豊國神社もそれぞれ整備して此等の豊公に最もゆかり
多き神社を豊公を祀るにふさはしい壯嚴なる神社とし度いと考へる。この外に
も豊公に因縁のある遺蹟にして復興すべきものは、調査の完了次第、適當に復
興し顯彰に努むべきは勿論である。

これ等の事業は、豊公顯彰の意味からすれば、あまりに遅すぎた觀がないで
もない。しかしながら、今からでも遅くはない。思ひ立つたが吉日であるから
直ちに實行に移したいものである。

しかも此等の中、今日より直ちに實行に移し度いと念願するのは大阪豊國神
社の移轉造營である。これは大阪が率先して直ちに實行せねばならぬ。

上來説き來つたところを熟讀せられた方は、何故に大阪が全國に率先して實
行しなければならぬかを、まさしく感得せられたことと信ずる。

豊公を海外に奉祀する建議

(二) 更に今日より直ちに關係各方面に建議し、實行を促したいのは、豊公を海外に奉祀する件である。その建議並に祭祀の方法に關する詳細なる意見は、別にこれを述べる豫定である。

豊公顯揚の一大綜合運動

(三) 此等の諸事業と共に、豊公精神を顯彰し、豊公精神を徹底せしむる爲には、豊公精神顯揚の一大綜合運動を起さねばならぬ。この運動は國民精神總動員運動と完全に一體なる運動であるから、この趣旨の下に、文武、内外各般に涉り、大いに國民の士氣を鼓舞すべきはいふまでもない。

豊公三百五十年祭を迎ふ

來るべき昭和二十三年は、豊公の三百五十年祭に相當する。この紀念すべき年には右の綜合運動を中心として統制をはかり、その大祭典を、一大國民的行事たらしめねばならぬと考へるのである。而して我等はここに國民大衆に對して一層積極的に豊公を祈れと絶叫するものである。豊公の如き大軍神を祈らずして、いかなる軍神に祈るべきであらう。よく國民大衆は熱誠こめてひたすら

國民大衆は國民大衆に祈れ

皇軍の大捷を豊公に祈るならば、興亞の曙光は、さはやかに全東亞の上に射してくる日も亦遠き將來ではあるまい。

豊公精神の顯彰と發揚

偉靈の降臨と加護を得せしめむ

この一大綜合運動によつて、豊公の偉靈を眞に全國民に徹底せしめ、國民ごとごとくにこの大英雄の偉靈の降臨と、加護とを得せしめたいと考へるのである。然らば世界も亦豊公を認識し、かかる英雄を生んだ日本を一層尊敬するであらう。

國につくすまこと

而して繰返していふが、これは實に、明治天皇がその御製に「國にこころをつくすこの人」と稱揚し給うた、豊公の國につくしたまことを顯彰せんとするものであり、また豊公の如く、國民各自の奉公の赤誠をいたさしめんとするものに外ならぬのである。

豊公は天眞爛漫の自然人

思ふに、人としての豊公は、また天衣無縫の明朗なる自然人であり、親に仕へては至孝、妻子に對しては至愛、對人關係に於いては至信、恰も日本晴の大空を腹中に置いた様な、巧ます飾らざる天真爛漫の人物であつた。人口に膾炙して、最も國民に親しまれる太閤の眞面目は實にここにあるのであるが、しかもその機智や縦横にして、一度計畫を立つれば、頗る細密、殆んど常人の端睨すべからざるものがあつたことも、人のよく知るところである。

豊公は盡忠至孝の人

かくの如く、豊公は公人としても、私人としても、盡忠至孝を以て終始し、早く東亞の大勢に着眼して、國策を遂行し、躍進日本の先驅者となつたのである。されば興亞の大業に邁進しつつある現時の日本に於いては、かくの如き大人物こそ、最も待望されるべき人物でなければならぬ。豊公の偉靈を祀り、その遺蹟を明らかにし、その史實を確かめ、その精神を發揚することは、時局下の日本に於いて最も必要な、かかる人物を待望する所以である。即ち上記の徳富

最も待望する人物

蘇峰翁の卓見

蘇峰翁も「皇室中心主義の根本義」と題する講演中に、「然しながら國家は、黄金のみで生きるものではない。金よりも人である。人の身體よりも其人の魂である。精神である。本當の人間の生命、魂、精神が茲に一國の魂、一國の精神となるのであります。」(蘇峰會誌、昭和十四年第一輯所載)といはれた如く、豊公を奉祀することは、また豊公魂、豊公精神を體得せる眞の日本人を作る所以である。

豊公の偉靈全東亞に蘇らん

而して、豊公を祀るべしといふ大いなる聲が、上記の如く豊太閤と最も深い因縁のある東亞の大經濟都市たる大阪から起つて、全東亞の津々浦々に及ぶならば、蓋し豊公の偉靈も亦、一層力強い神靈として全東亞に蘇り來ることであらう。かくて興亞の長期建設は、完全に遂行せらるべきは、疑のないところである。

豊公精神は即ち奉公精神

即ち豊公精神は、換言すれば奉公精神であるから、かくの如き豊公精神の發

揚を志す我等の微意も亦、國民精神總動員の趣旨を體し、肇國以來の忠靈を顯彰し、興亞の大業を翼賛し奉り、皇國の彌榮を希ふより外に、毫も他意なきこと勿論である。大東亞の地圖が日に日に興亞の色に塗りかへられつつある光榮の日に當り、敢て滿天下の諸士に向つて「豊公を祀れ」と絶叫する所以である。

桃山文化の復興を期す

以上縷々として、豊公を祀らねばならぬ所以を力説し、豊公の偉業を顯彰し、一層豊公神靈の加護を仰がんがために、國民的一大綜合運動を起すべき趣旨を述べ來つたのであるが、この運動が澎湃として、大東亞の天地に捲き起る時、ここに我々は、世界史上に絢爛たる光彩を放つた、わが桃山時代文化の復興を期することが出来るのである。

もつとも所謂桃山時代は、豊公の出でた後陽成天皇の御代の前後約五十年の時代を意味するのであるが、これは更に擴大して、その短を捨て、桃山文化の特長を、眞に昭和の聖代に復興し、再生せしむることは、大御代の榮を彌増し奉らんとする微意に外ならぬ。

いま最も簡略に桃山文化の特長を述べて、その復興を齎す實果をあぐるならば、凡そ左の如くであらう。

一、桃山時代は分裂し切つた戦國時代より、統一の機運が大成された時代であるから、雄大豪壯の元氣が社會に滿ち、大國民としての日本人の眞面目が發揮された。そしてそれは國內のみならず、海外にも發揚され、ここに日本人が八紘一宇の皇國精神を奉戴して、眞に世界人として活動し得たものである。而してこの元氣激瀾たる日本人の意氣込は、大東亞の盟主として、その永遠の平和を確保せんとする、今日の日本の使命の上に、最も大

切な原動力となるべきものと信せられる。

二、國史上桃山時代程、金、銀等の産出の夥しかつた時代はない。従つて當時の日本の産業の發達は、前古にその比なく、經濟は豊かに、商賣は最も繁昌した。即ち我國に於いて産業の最も殷賑を極めた時代としては、桃山時代と現代とを、國史上に於ける二大時期とすべきであらう。興亞の大業は産業から」といはれるが、その産業の發達を願ふならば、桃山時代に復古し、その時代を指導した豊公の意氣込を以て、産業の開發に邁進しなければならぬ。

三、桃山時代は文化史上、太古よりの純日本精神が、最も顯著に復興した時代である。即ち所謂文藝復興の時代である。日本文化の眞面目を發揮して、新日本世界文化を築くべき昭和の日本に、桃山文化を復興して、思想、文學、繪畫、彫刻、藝術その他各般の日本藝道より、武道體育に至るまで、

日本的なものを一層盛大ならしむることは、精神日本が、世界を指導し新しき世界を創造する所以である。しかしそれは排他的であつてはならぬ。桃山時代の如く氣宇豪壯最も包容的であつて、しかも大和魂を中心にしつかりと持つたものでなければならぬ。

其他述べれば限り無いものがあるが、今は上述の程度に止めて、最後に、天皇中心主義を奉じた豊公の精神を顯揚することは、祭政一致の國風を奉戴して、眞に桃山文化の復興を期するものであり、同時に光輝ある國史即ち正しき事實に基づいて、具體的に國民の士氣を鼓舞せんとする最も具體的な忠靈の顯彰、皇道歴史の建設即ち國體明徴運動であることを強調して擲筆する。

生 け る 豊 太 閣



不 許 復 製

昭和十四年七月十日印刷
昭和十四年七月十五日發行

定 價 五 拾 錢

著 者 鳥 井 壽 山 人

東京市京橋區銀座西五丁目五番地
菊地ビル内

發 行 人 佐 藤 寬 治

東京市豊町區有樂町壹丁目十四番地

印 刷 人 中 村 伯 三

東京市豊町區有樂町壹丁目十四番地

印 刷 所 會 社 大 參 社

東京市京橋區銀座西五丁目五番地
菊地ビル内

發 行 所 世 界 創 造 社

電話銀座(57)三五四六番
振替東京一一六一四二番

參謀本部部長 陸軍歩兵中佐 高嶋辰彦著 戦争文化研究所發行

皇 戰

皇道 總力 戰
世界維新 理念

菊判 定價 料 二五〇
八錢 頁

皇道日本の完成。荒廢アジアの復興

欺瞞世界の轉換に關する綜合的建設的指標

夙に軍の樞機に在る著者が今次事變の體験と思索に基き、聖戰即皇戰の意義を明にし、皇道に即する總力戰遂行の原理を究め、日本世界建設の指標を全世界に明示せる舉世必讀の大文字！

内 容

明治天皇御製
世界史の轉換
近世世界の成立 二十世紀に於ける總力世界大戰の繼續 轉機としての歐州大戰 革命の呼聲 邦出現の意義 東西相呼應する世界新運動 本舞臺として支那の消長 尊き皇戰の支那事變の體験

支那大陸戰爭の特異性 支那事變勃發以來の真相

支那事變の見地よりする内外情勢の觀察
皇戰の目的 存亡興廢の岐路 我れ等の實力 國内改革の急務 戰と文

總力戰の本質 總力戰の意義 内容 骨幹たる戰と平戰兩時

皇戰の建設 皇戰の根柢 皇道に即する兵學 軍備と國民の革新 皇道に對する皇道經濟戰の機構

我が國と總力戰 總力戰に關する我が國の素地 皇道に通ずる戰力の翼賛 皇道に即する總力戰の翼賛

皇戰の對外策 皇戰の對外策 皇戰の對外策 皇戰の對外策

皇戰の對外策 皇戰の對外策 皇戰の對外策 皇戰の對外策

世 界 創 造 社 發 賣

仲小路 彰著 日本問題研究所發行

日 本 精 神 論

菊判 定價 料 三〇一
二圓五錢 頁

根 本 命 題

- 1 日本精神は、それ自らの根源性において、神話による一切の世界精神を生命化し、純粹化する。
- 2 日本精神は、それ自らの發展性において、眞理による日本世界史を實存化し、象徴化する。
- 3 日本精神は、それ自らの主體性において、戰爭による日本世界史を現實化し、必然化する。
- 4 日本精神は、それ自らの創造性において、文化による世界民族國家を綜合化し、大和化する。
- 5 日本精神は、それ自らの普遍性において、眞の皇政による世界統一を十全化し、體系化する。
- 6 日本精神は、それ自らの本質性において、皇道宣布による世界完成を壯嚴化し、組織化する。

目 次

- 第一部 日本精神論序説
- I 根本命題
 - II 宇宙の根源的統一
 - III 世界の創造
 - III 光の思想
 - V 皇道
 - VI 日本的還元
- 第二部 日本精神思想史
- I 古 代
 - II 中世 日本精神
 - III 近世 思想の展開
- 第三部 日本世界精神
- I 日本世界精神
 - II 世界精神の展開
 - III 近代西洋思想精神
- 第四部 日本精神の本質的機構
- I 日本學の創造
 - II 日本學體系
 - III 方法論の確立
 - III 日本學體系の學的内容
- 附錄 世界維新戰(一)

世 界 創 造 社 發 賣

仲小路 彰著 日本問題研究所發行

世界戰爭論

菊判 三二八頁
定價 二圓五十錢
送料 八錢

戰爭は、存在そのものの根源的矛盾に由る一民族、一國家或は國家群の最大最高の全能力・全生命力を集中・凝結せる人類における活動性の最も強力なる發揮といふべく、まさに社會における各領域の全體的聯關の最深なる自己表現である。それは單に平和に對立するものではなく、却つて世界史の劃期的發展を實現するものである。我々日本人は、今や來るべき世界戰爭の世界史的意義を十全に達成するために、この世界の全面把握をなすべき「戰爭學」の建設を必須とする。此處に全日本に對して最も創造的なる戰爭學を贈る。

目次

| | |
|----------------|----|
| 第一篇 緒言 | 一 |
| 二 戰爭の哲學的原理 | 二 |
| 三 戰爭政治學 | 三 |
| 四 戰爭經濟學 | 四 |
| 五 戰爭法律學 | 五 |
| 六 戰爭工業學 | 六 |
| 七 戰爭物理學 | 七 |
| 八 戰爭統帥學 | 八 |
| 九 軍備 | 九 |
| 一〇 戰略戰術學 | 一〇 |
| 一一 戰爭精神學 | 一一 |
| 一二 戰爭社會學 | 一二 |
| 一三 戰爭醫學 | 一三 |
| 一四 戰爭文化學 | 一四 |
| 一五 戰爭民族學 | 一五 |
| 第二篇 戰爭の世界史的發展 | |
| 一 原始時代の戰爭 | 一 |
| 二 古代民族戰爭 | 二 |
| 三 古代國家戰爭 | 三 |
| 四 中世世界獲得戰 | 四 |
| 五 近代國家戰 | 五 |
| 六 世界民族戰爭 | 六 |
| 第三篇 世界戰爭 | |
| 一 支那事變 | 一 |
| 二 世界長期戰 | 二 |
| 附錄 世界維新戰 | |
| 第一篇 日支開戰・七月の戰況 | 一 |
| 第二篇 八月の戰況 | 二 |
| 第三篇 九月の戰況 | 三 |

世界創造社發賣

小島 威彦著 日本問題研究所發行

哲學的世界建設

菊判 二〇八頁
定價 一圓八十錢
送料 八錢

今や、世界史は日本理念によつて眞實なる闡明をうけ、日本史は新なる世界建設によつて自己の現實的なる表現をもたねばならぬ。今日迄の哲學は悉く西歐の植民地的世界政策に隨伴されたものであつて、眞に日本が新なる世界史的變革の主體となつて、自己の哲學體系を樹立せんとする企圖に至つては、未だ何人によつても試みられたことがない。西歐の植民地、アジア・アフリカ・東歐に諸民族の運命を凝視し來つた著者は、今此の輝しき世界史的變革を敢行する日本に歸り來り、其の方向と體系を提出した。

目次

| | |
|----------------|-----|
| 第一篇 世界史的日本的把握 | 一 |
| 一 日本的世界的把握 | 一 |
| 二 日本的世界的必然性 | 二 |
| 三 世界史的必然性 | 三 |
| 二 東洋と西洋 | 一 |
| 一 ベルシア | 一 |
| 二 アツチラ | 二 |
| 三 成吉思汗 | 三 |
| 四 イギリス | 四 |
| 五 日本 | 五 |
| 三 日本史と世界史 | 一 |
| 一 歴史の秘密 | 一 |
| 二 世界史の逆流 | 二 |
| 三 日本史のルネッサンス | 三 |
| 第二篇 日本と世界 | |
| 一 日本主義 | 一 |
| 二 世界史の谷間 | 二 |
| 三 地理辯證 | 三 |
| 四 將來史 | 四 |
| 五 民族政策 | 五 |
| 六 文化工作 | 六 |
| 七 日本とアジア | 七 |
| 八 日本とナチス・ドイツ | 八 |
| 三 日本建設論 | 一 |
| 二 日本の二面性 | 二 |
| 一 日本建設論 | 三 |
| 二 日本の歴史・地理・哲學 | 四 |
| 三 日本の歴史・地理・哲學 | 五 |
| 四 日本の歴史・地理・哲學 | 六 |
| 五 日本の歴史・地理・哲學 | 七 |
| 六 日本の歴史・地理・哲學 | 八 |
| 七 日本の歴史・地理・哲學 | 九 |
| 八 日本の歴史・地理・哲學 | 一〇 |
| 九 日本の歴史・地理・哲學 | 一一 |
| 一〇 日本の歴史・地理・哲學 | 一二 |
| 一一 日本の歴史・地理・哲學 | 一三 |
| 一二 日本の歴史・地理・哲學 | 一四 |
| 一三 日本の歴史・地理・哲學 | 一五 |
| 一四 日本の歴史・地理・哲學 | 一六 |
| 一五 日本の歴史・地理・哲學 | 一七 |
| 一六 日本の歴史・地理・哲學 | 一八 |
| 一七 日本の歴史・地理・哲學 | 一九 |
| 一八 日本の歴史・地理・哲學 | 二〇 |
| 一九 日本の歴史・地理・哲學 | 二一 |
| 二〇 日本の歴史・地理・哲學 | 二二 |
| 二一 日本の歴史・地理・哲學 | 二三 |
| 二二 日本の歴史・地理・哲學 | 二四 |
| 二三 日本の歴史・地理・哲學 | 二五 |
| 二四 日本の歴史・地理・哲學 | 二六 |
| 二五 日本の歴史・地理・哲學 | 二七 |
| 二六 日本の歴史・地理・哲學 | 二八 |
| 二七 日本の歴史・地理・哲學 | 二九 |
| 二八 日本の歴史・地理・哲學 | 三〇 |
| 二九 日本の歴史・地理・哲學 | 三一 |
| 三〇 日本の歴史・地理・哲學 | 三二 |
| 三一 日本の歴史・地理・哲學 | 三三 |
| 三二 日本の歴史・地理・哲學 | 三四 |
| 三三 日本の歴史・地理・哲學 | 三五 |
| 三四 日本の歴史・地理・哲學 | 三六 |
| 三五 日本の歴史・地理・哲學 | 三七 |
| 三六 日本の歴史・地理・哲學 | 三八 |
| 三七 日本の歴史・地理・哲學 | 三九 |
| 三八 日本の歴史・地理・哲學 | 四〇 |
| 三九 日本の歴史・地理・哲學 | 四一 |
| 四〇 日本の歴史・地理・哲學 | 四二 |
| 四一 日本の歴史・地理・哲學 | 四三 |
| 四二 日本の歴史・地理・哲學 | 四四 |
| 四三 日本の歴史・地理・哲學 | 四五 |
| 四四 日本の歴史・地理・哲學 | 四六 |
| 四五 日本の歴史・地理・哲學 | 四七 |
| 四六 日本の歴史・地理・哲學 | 四八 |
| 四七 日本の歴史・地理・哲學 | 四九 |
| 四八 日本の歴史・地理・哲學 | 五〇 |
| 四九 日本の歴史・地理・哲學 | 五一 |
| 五〇 日本の歴史・地理・哲學 | 五二 |
| 五一 日本の歴史・地理・哲學 | 五三 |
| 五二 日本の歴史・地理・哲學 | 五四 |
| 五三 日本の歴史・地理・哲學 | 五五 |
| 五四 日本の歴史・地理・哲學 | 五六 |
| 五五 日本の歴史・地理・哲學 | 五七 |
| 五六 日本の歴史・地理・哲學 | 五八 |
| 五七 日本の歴史・地理・哲學 | 五九 |
| 五八 日本の歴史・地理・哲學 | 六〇 |
| 五九 日本の歴史・地理・哲學 | 六一 |
| 六〇 日本の歴史・地理・哲學 | 六二 |
| 六一 日本の歴史・地理・哲學 | 六三 |
| 六二 日本の歴史・地理・哲學 | 六四 |
| 六三 日本の歴史・地理・哲學 | 六五 |
| 六四 日本の歴史・地理・哲學 | 六六 |
| 六五 日本の歴史・地理・哲學 | 六七 |
| 六六 日本の歴史・地理・哲學 | 六八 |
| 六七 日本の歴史・地理・哲學 | 六九 |
| 六八 日本の歴史・地理・哲學 | 七〇 |
| 六九 日本の歴史・地理・哲學 | 七一 |
| 七〇 日本の歴史・地理・哲學 | 七二 |
| 七一 日本の歴史・地理・哲學 | 七三 |
| 七二 日本の歴史・地理・哲學 | 七四 |
| 七三 日本の歴史・地理・哲學 | 七五 |
| 七四 日本の歴史・地理・哲學 | 七六 |
| 七五 日本の歴史・地理・哲學 | 七七 |
| 七六 日本の歴史・地理・哲學 | 七八 |
| 七七 日本の歴史・地理・哲學 | 七九 |
| 七八 日本の歴史・地理・哲學 | 八〇 |
| 七九 日本の歴史・地理・哲學 | 八一 |
| 八〇 日本の歴史・地理・哲學 | 八二 |
| 八一 日本の歴史・地理・哲學 | 八三 |
| 八二 日本の歴史・地理・哲學 | 八四 |
| 八三 日本の歴史・地理・哲學 | 八五 |
| 八四 日本の歴史・地理・哲學 | 八六 |
| 八五 日本の歴史・地理・哲學 | 八七 |
| 八六 日本の歴史・地理・哲學 | 八八 |
| 八七 日本の歴史・地理・哲學 | 八九 |
| 八八 日本の歴史・地理・哲學 | 九〇 |
| 八九 日本の歴史・地理・哲學 | 九一 |
| 九〇 日本の歴史・地理・哲學 | 九二 |
| 九一 日本の歴史・地理・哲學 | 九三 |
| 九二 日本の歴史・地理・哲學 | 九四 |
| 九三 日本の歴史・地理・哲學 | 九五 |
| 九四 日本の歴史・地理・哲學 | 九六 |
| 九五 日本の歴史・地理・哲學 | 九七 |
| 九六 日本の歴史・地理・哲學 | 九八 |
| 九七 日本の歴史・地理・哲學 | 九九 |
| 九八 日本の歴史・地理・哲學 | 一〇〇 |

世界創造社發賣

清水宣雄著 アジア問題研究所發行

アジアの宣戰

四六判 二五二頁
定價 一圓五十錢
送料 十圓八十錢

何が故にわれらはヨーロッパ文化を變革し、古き文化の傳統に生きるアジアの文化をもつて、新しい世界文化を創らなければならないか？ 何が故にわれらは、政治的にも、經濟的にも、文化的にも、世界のヨーロッパ的現機構を變革して、世界に新しい様相を持ち來たさなければならぬか？ この新しい世界史の認識のために、今こそアジアの宣戰はなされなければならない。

内容

- 第一篇 **アジアの宣戰**
- 一 戦ひの宣言
 - 二 ヨーロッパの世紀 1 人間の開放 2 植民地掠奪 3 ヨーロッパの没落
 - 三 アジアの世紀 1 日本の勃興 2 ヨーロッパはアジアの半島である 3 ヨーロッパはアジアを理解するか！ 4 被壓迫階級とは何であるか？
 - 四 英國撃つべし 1 英帝國 2 イギリスの傳統的世界欺瞞政策を見よ！ 3 英國撃つべし 4 植民地再分割論を排撃せよ 5 イギリスは世界に何を與へたか？
- 第二篇 **アジアの情熱**
- 一 文化植民地解放 1 革新の頭腦 2 帝國大學亡ぶべし！ 3 「民主」とは何であるか
 - 二 世界史の創造 1 表徴の哲學 2 社會と個人 3 インターナショナルイズムとナショナルイズムの理論 4 英雄と天才と科學者 5 藝術と哲學と科學 6 歴史を創るものは誰れであるか？
 - 三 變革期の激情 知識階級に與ふ
 - 五 來るべき世界 1 世界文化の變革 2 王道とは何であるか？ 3 經濟とは何であるか？ 4 政治とは何であるか？ 5 農村と都市の統一へ！ 6 神話の黎明 7 日本 8 戦争へ！

世 界 創 造 社 發 賣

吉田 三 郎 著 日本問題研究所發行

日本建設史論

菊判 二五〇頁
定價 一圓八十錢
送料 十圓八十錢

日本戦争は文化を破壊するものなりや、日本の眞の敵は何處にありや、本書は過去の史論の性格と現代の世界情勢とを闡明しつつ、これ等の間に對する斷乎たる回答を與へたものである。眞に國民文化建設の指標と日本史の發展的熱情とを與ふるに足る日本文學、此處に始めて出づ！！

路傍に石の如き、片々たる國內的史家は既に死せり。今や大なる日本の世界史的躍動は、著者の深き國史の研究を通して、方向を見出し得たのである。

目次

- 序 篇 國 史 論
- 一 歐米的日本人の誕生
 - 二 日本の文化
 - 三 國 史 論
 - 第一篇 日本史論史
- 一編 日本史學論
- 一 日本史學論
 - 二 日本史籍論
 - 三 日本建設史論
- 二編 日本戦争史
- 一 日本文化圈
 - 二 神功皇后御親征
 - 三 新羅と日本
- 三編 對 歐 外 交 史
- 一 歐洲諸國のアジア侵略史
 - 二 日本世界史に於ける英國
 - 三 世界史としての日本

世 界 創 造 社 發 賣

志田延義著 日本問題研究所發行

新史代の神話篇

日本文學論

菊判 二〇三頁
定價 一圓六十錢
送料 八錢

新史代の神話篇!!

日本の道義世界建設の神話、日本の歴史的使命遂行を指導する宏大なる神話體系が、現に我等の有つところであるに拘らず、克く之を今日の神話として我等に提示し得た者があつたか。此の我等の不滿を以て著者の不滿とし、日本神話體系の搖ぎなき學的闡明を以て今日の神話を提示したところに、本篇出現の史代的意義が見出される。見よ、かつて見るを得ざりし宏大なる今日の神話體系の展示を。

目次

- 第一部 古典論 (古典・古典結集と國際情勢・古典復歸と國際情勢)
- 第二部 神話論 (神話・古事記の體系・日本紀の立場)
- 第三部 今日論 (今日・皇孫降臨・神話日本史)

戰 争 文 化 叢 書

| | |
|------|------------------------|
| 第一輯 | 日本百年戦争宣言 (既刊) 戦争文化研究所 |
| 第二輯 | 植民地解放論 (既刊) 太平洋問題研究所 |
| 第三輯 | 八紘一宇 (既刊) 日本問題研究所 |
| 第四輯 | 獨伊の世界政策 (既刊) 歐洲問題研究所 |
| 第五輯 | 支那人は日本人なり (既刊) 支那問題研究所 |
| 第六輯 | 文學戰争 (近刊) 映畫文化研究所 |
| 第七輯 | ユダヤ再認識論 アジア問題研究所 |
| 第八輯 | アメリカ人道主義批判 アメリカ問題研究所 |
| 第九輯 | 映畫文化研究 映畫文化研究所 |
| 第十輯 | 日本教育改革論 日本問題研究所 |
| 第十一輯 | 世界青少年運動 日本問題研究所 |
| 第十二輯 | 反英回教徒 アジア問題研究所 |

— 以下續刊豫定 —

世 界 創 造 社 發 賣

世 界 創 造 社 發 賣

日伊同盟
雜誌

フアツシヨ

イタリ
定 價 每 月
ア 社 三 發
送 號 料 一 〇
行 錢 錢

フアツシズム眞意の闡明！ 道義世界創造の進軍歌！

今日イタリアを語るものはフアツシズムを語る。ムツソリニの事業は日本に於ては理解せられるよりも寧ろ賞歎せられて居る。人々は特に其消極的方面、即ち反自由主義的・反議會主義的性質を知つて居る。フアツシズムがかゝる性質を有することは疑なき所である。けれどもフアツシズムが主として此點にのみ限られると信ずるのは誤である。かゝる消極的方面、かゝる反自由主義的・反議會主義的性質は、各分野に於ける其偉大なる積極的事業の完成に對する前提であつた。此偉大なる事業は常に發展の過程に存する。其主要なる制度の多く、例へば労働事業の如きは、如何によく理解せられたデモクラシーの諸原理を適用しても、デモクラシーと名乗り、全體的制度に反對することを誇とする政治的制度の中に存在することは不可能であらう。彼等はデモクラシー制度を總ての獨裁主義の反對者なりと宣言して居るが、而も數量の獨裁といふ最も悪い獨裁を受容して居るのである。何となれば數量は能力とは全然同義語ではないからである。労働憲章は總ての他のフアツシズト組織と同じく社會階級（若しもかゝる社會主義的な言葉が許されるならば）の上に超越する國家を前提とするものであり國家は國家其ものの公益の爲に社會階級の行動をも規定して居る。而も此公益は結局、上述の社會階級の個人的な利益に適合することとなるのである。蓋し一般的な幸福なくしては、有機體の多くの部分の完全にして繼續的な幸福はあり得ないからである。

——本誌創刊に寄せられた駐日伊國大使ジ・アウリテイ閣下の祝辭の一節——

皇道世界維新の總力戰的實現！！ 日本世界主義の全面的樹立！！

本誌は世界の各領域及部門に亘り、日本の世界原理による研究、調査、批判闡明を精密に實行し、眞の全面的革新の指標を明示せんとしてゐる。

本誌より全世界の一切の部面、問題、方向等に明確なる解明と應答とを與へ、こゝに甫めて、長期建設、國家總力戰の最も正しき世界史的展開を實現し得るのである。かくして近代の西洋社會文化を否定し、これに代る日本の世界秩序を強力に確立せんとする。

戰 争 文 化 研 究 所 發 行

戰 争 文 化 研 究 所 發 行

所 賣 發

世 界 創 造 社

東京市京橋區銀座西五ノ五 菊地ビル内

電話 銀座(57)三五四六番
振替口座東京一一四二番

世 界 創 造 社 發 賣

390
290

ちやくこーらふめこやこを
さいてん救 ほうりせとらや
うてんやこおのせうりまどーん
やまーりー せんおそろー
トてちやくめこのん救お

終